

---

# 東方吸血鬼

ふれいむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方吸血鬼

### 【NNコード】

N5449Z

### 【作者名】

ふれいむ

### 【あらすじ】

彼は世界で最後の吸血鬼だった。彼の力は皆から恐れられ、すべての人間から追われた。彼は世界から捨てられて、彼も世界を捨てた。そして彼は自ら幻想の存在となつた。

ついた先は遙か昔、彼は第一の人生をどう生きる?  
これは彼が世界に、人々の心に受け入れられていくちょっとおかしな物語。

葛藤は全ての輪廻が、因果応報で全てのピースが噛み合つて見えてくるのは……

## 世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる

俺には力があった、人を超えた力があった。圧倒的な強さ、子供が持つには大きすぎる、絶対という言葉で形容されてもおかしくはない力を持っていた。正確には、もとから持っていた力と、与えられた力。

けれどもそれで手にするものは、何もなかつた。あつたのは俺を異端扱いする眼だけ。

ただ忌み嫌われて、追われて、居場所がなくなつて。どうしようもなくなつて逃げた。

それを、みんなは煙たがるように自分たちから遠ざけた、俺は一人だった。

この原因はなぜか？ 俺が吸血鬼だからだ。既におどぎ話となつている存在。俺はそんな存在であった。

俺は十四歳の冬の日、この世の最後の吸血鬼になつた。

西暦4039年、今年で俺は2050歳。既に成長は中学生のうちに止まり、老化も止まる。

翼が生えてきたのはいつだつたか、俺の今までの人生を血で塗るかのような深紅の翼。爪も牙も鋭くなり。日光、流水、純銀、同時に弱点も生まれた。

黒く、地面につくほど長いコード。顔を隠すフード。ただし、翼を通す穴だけは開いていた。

それは、俺が夜に紛れる為の。黒に染まるためのものだつた。  
左頬の金色の痣、三つ巴を描くそれは吸血鬼の証。レミリアにはこんなものないが……理由はわからない。

世界が俺を捨てたように、俺も世界を捨てた。

俺は遙か昔、とある存在と出会った。

「東方Projectというゲームの世界、きっかけはどうに忘れてしまったが。

「幻想郷はすべてを受け入れる」、その言葉は彼にとって何とも言えない響きを持っていた。

もし、これが本当にものだったなら……俺だって受け入れてもらえる、異端として追い立てるのではなく、一つの存在として受け入れてもらえる。それを夢見てた。

吸血鬼が実際に受け入れられている世界、俺は望んでいた。そう、こうして2000年間の間、俺はすべてに忘れ去られるように、日の当たらないところで死に近い生活をしていた。

もし、それが本当に存在するものだとわかった時は、どれだけ感涙に浸つたことが。

俺は、その理想郷を目指すよくなつた、誰でもない、自分の居場所を求めて……

そしてある日、俺はたどり着いた。全てを受け入れる理想郷への扉を見つけた。

そして、今夜が決行の日。

俺は自ら幻想への扉を開く、不可視にて、その存在が絶対な。それ

を

その日、世界から一人の青年が、幻想の存在となつた。

気がつけば俺は見知らぬ場所にいた。今は夜か、星空がきれいだ、俺はこのままこの輝きを見ないで、束縛された永遠をただ生きるだけの存在として生きるはずだった。その輪廻から俺は抜け出した。俺はたどり着いたんだ。

ここは神社の境内か。田の前に建物があるのに歩き出せない。けれどもここは幻想郷のどこだろう？　どこかで見たことがあるような気がする。しかし考える暇を時は与えてくれなかつた。

疲れという抵抗不可のものが、俺に襲いかかる。おれはその場に崩れ落ち、眠りに落ちた……

傍に、憧れの存在を目指した。黒い日傘が音を立てて落ちた。装飾も何もないシンプルなそれは、彼の性格を物語ついていた。

そして、入れ違いになるように神社の障子が開かれ、彼を見つけ出し、中へと運び込んだ。

彼の日傘を見て、不思議には思つたけれども考えないことにした。ただ、彼を保護したのであった。

温かい、ぬくもりを感じる、これが遙か昔に俺に向けられなくなつた感情なのか？

今ではそれさえもわからない。ここはどこなんだ？

冷静になつて今の状況を見てみる、ここは……おそらくさつきの神社の中であろう、どことなくそれらしい雰囲気が漂つている……足音が聞こえるな、俺を助けてくれた人であろうか？ だとしたら助かった。

あの日差しの中に取り残されていたら俺は今頃灰になつていただろう。これは、俺が受け入れられたということか。なんだか嬉しいな、涙が出そうだ。こういう風に泣きそうになつたのは何年振りだろう？

俺は、これを求めていたのか。しかし、みつともない姿を見せるのは少し嫌な感じがするな、堂々としておこうか。

そうして部屋に入ってきたのは、俺の予想もしない人物だったけど。そう……

「（諭訪子様……だと……）」

そう、どこからどう見てもあの東方の洩矢諭訪子だったのだから。驚きを通り越す。

「目が覚めたみたいだね、元氣かい？」

「ああ、助けてくれて感謝する」

ああ、さすがにいきなり名前で呼ぶわけにはいかないからってなんて言おうか考えてたら……てんぱつて無愛想になってしまった。

「私は洩矢諭訪子、あんたはなんていうの？」

「俺か？ 人間だったころの名前は千年以上も前に捨てた。それ以来名前なんか使う機会なかつたし、そんなものはない」

諭訪子は驚き、特に千年のところで大きく驚いた。確かに俺はかなり年上なんだろうけどさ。未来人だけど。

そしておそらく興味本位で聞いてきたのだろう。どうしてそんなことになったのかとな。

「ねえ、よかつたらあんたについて詳しく教えてくれない？　お近づきのしるし」「元」

「別にかまわないけど、あまり気分がいい話とはお世辞にも言えない。それでもいいのか？」

それに本当のことをするべて話すのはできない、ここが東方という世界だということに関しては本人たちが知つてはいけないことだらう。なぜだかそれだけはわかる。

「別にいいよ、話してもらえるだけありがたいんだから」

俺は少し間をおいて、ゆっくりと全てのことを話しだした。

多少変えてはいるが、東方の存在を知らず、気が付いたらここにいたといつことにしておけばいいだらう。それでも十分筋は通った話にはなる。まあ、これが俺の腐りきった人生さ。

長い間話した、醜いことをすべて吐き散らした、残ったのは空っぽの器だけだった。

そして、諭訪子がゆっくりと口を開いた。

「じゃあ、よくわからぬけど、じつでみんなに受け入れてもらえばいいんじゃない？　最低でも私はあんたの味方でいてあげるからぞ」

「そうか、ありがと」

満足した様子で、彼は笑みを浮かべた。それは、彼の人生の中で、

一番綺麗なものだった。

「じゃあ教えてくれないか？　今度は君の事を」

彼の大きな疑問、それは、ここが守矢神社なら本来いるべきあとの二人がないこと。彼はそれを自然に聞き出そうとした。そして得た答えはとてもではないが考えられないものだった。

「こは、幻想郷ができた時代よりはるか昔、諏訪大戦よりも少し昔であったのだから。

彼は驚きはしたが、悲しみはしなかつた。だつて彼が得られる結果はどうやらでも変わりはなかつたのだから。

「とりあえず、うちで暮らしていかないかい。あんたがいると退屈しなさそうだ」

言葉の奥には、同情とはまた違う意味が込められていた。神と人間との差を理解している彼女だからわかる、種族の違いという壁の辛さ。それを彼に感じたからだった。

「そうか、だつたら好意に甘えるとしよう。これからよろしく頼む。わかっているとは思うが、精神が死に切つた世捨て吸血鬼だが、それなりに役には立つだろう」

自分で自傷していても、何も感じない。それは成長なのか退化なのか？

「じゃあさ、名前を決めようよ。ここで暮すんだからあんたじゃ不便だしさ。どうだい、自分でかつこいい名前でもつけてみたらどうだい？」

「名前か、考えたことはあまりなかつたな……いつそのことこの吸血鬼としての力からとつてしまおうか。そうだな、紅羽あかはね霧きり、こう名乗らせてもらうか。自分という吸血鬼はここにいるという意味としておこう。この名前が俺の存在の証明となるように」

「いい名前じゃないか、じゃあ早速信頼の意味でご飯にしよう。何か食べたいものはあるかい？」

……正直に言つたらまずいよなあ、人間の血液、できれば若い人の希望なんて。

ここは適当な動物で我慢するしかないのか。さすがに自分の領土の人間が被害にあっていい顔はしないだろう。けどなあ、俺千年単位で血を摂取してないわけで、できれば人のやつがいいんだけどなあ。まあ贅沢は言つてられないか。

「……食べ物ならなんでもいいけど、できれば動物の血でもあるとうれしい」

「ああ～なるほど、仮にも吸血鬼つてことなら……今から適当に猪でも捕まえてくるから待つって」

……以外に野生児な神様だつたんだな、諏訪子つて。まあ以外といふわけでもないけど、むしろ妖精とかと一緒に遊んでそうな雰囲気あるし。

まあ昼間は迷惑かけちゃつかもしないけど、基本夜型だし、大丈夫だろう。

さて、いじは信頼の証が来るのを待たせておきましょう。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる（後書き）

はじめましての方ははじめまして、他の小説を読んでくださっている方は、「無沙汰します、ふれいむです。」

今回は過去転生最強ものに手を出してみました。どうかこれからもよろしくお願いします。

感想指摘評価、なんでも待っています！

## 男は自らの忌み嫌われた力を見る

食事の時間が終わつた。

言つた通り本当に猪を捕まえてきた諭訪子、ちなみに久しぶりに飲んだ血でテンションが上がり、一敵残らず飲み干してしまつた。

とりあえず今は、案内された日光を完全にシャットアウトできると いう部屋にいる。

そこで諭訪子とこれからのこと話を話し合つつもりだ。

しかしこの時代でもう日光を完全に遮ることができなんて、案外建築技術は昔からの受け売りなのかもしれない。

そんなことを考えているうち、諭訪子が口を開いた。

「じゃあさ、とりあえず霧は夜型なわけだ、じゃあ私が寝てる間に霧が活動をして、昼間はその逆になるつてことだね」

「ああ、日が沈んでいる間は俺も自由に行動できるから、今日みたいなことはしなくても大丈夫だ、適当な動物でも襲つて食べてるさ」

諭訪子は一瞬迷った顔をしてから答えた。

「人間じゃないんだね」

「さすがに諭訪子の領土で他の吸血鬼を作るつもりはないさ、いや、永遠に作るつもりはない。人間の血が足りなくて、禁断症状らしきものが出来たら、適当にこいつそり抜き取るさ。牙を使わずに。まあそんなことはめったにないが」

だけど、千年以上まつたく活動しないことによつて今まで耐えてきたのだ、どうなるかはわからないが……

諏訪子は俺の事情を知つてゐるだけあってすぐに納得してくれた、俺が自分と同じような境遇の人間を作りたくないといふことを悟つてくれたのだらう。

「とつあえず、夜と昼の境目の短い時間しか話はできない。けれどもどちらも一日寝なごくらごどつてことないからな。そこには問題がないだらう」

神も吸血鬼も一日一日の徹夜でへばつたりはしない。その気になれば、諏訪子はずつと寝なくとも大丈夫だらう。俺はやばくなるけれども。

とにかく、夜型と昼型の同居でも、まったく問題がないわけだ。

「じゃあさ、もしいいんなら霧の力を見せてよ。人間から追われるほどの力を見てみたいしさ」

……なるほど、確かに気になるな、という方が無理かもしれないな。けれども……いや、ここはすべてを受け入れるのだから、俺の力はむしろ知つてもらつた方がいいだらう。その方がいざといふ時に役に立つかもしれない。

そのとき諏訪子は、考え方をしてくるときに霧の翼がぴくぴく動くといふかわいらしき癖を見つけた。もちろん内緒にするが。いざといふ時にばらすつもりであるだ。

「わかった、じゃあ今夜、日が落ちたら見せてやる

「じゃあ今はとりあえずここここな、何かあつたら呼んでちょうだい

諏訪子は部屋から出て行った。

残されたのは静寂だった、しかし、ここには俺の隠れ住んでいた場所の静寂とは違う。あくまで静まり返る中に、目に見えない光があった。

本当に、諏訪子の優しさに感謝する。もし境内で灰となつて一生を終えていたら、自分は浮かばれなかつたであろうから。

「さて、夜まで眠つておこうか、久しぶりの夜を満喫するためにも

俺は早速、丁寧にひかれていた布団に入つて眠りについた、まだ疲れが残つていたのだろうか、あっさり眠れてしまった。

「もう日が暮れたよ、そろそろ起きたらどうだい？」

この声は……諏訪子か、もう夜だというのか。

目を開けて周りを見渡すと、窓があいているのにも関わらず、入ってくるのは太陽の光ではなく、優しい月の光であった。

「目が覚めた？ 約束の夜だよ」

「ああ、そういうえば俺の力を見せるという約束だったな、すっかり忘れていた。

「じゃあここから離れよう、一応直ぐに衰弱して死ぬ程度まで力を出せば、地形を変える程度の力はあるものでな。どこか広い所がいい」

「広いところねえ……まあついてきて」

いま俺が言ったことは本當だ、ただ俺には二つの力があり、片方は人間だったころから持っていた。万能で代償がない。これは能力ではなく俺の特殊性だ。魔法でもなく、純粹な俺の力だ。

もう一つは吸血鬼になつてから手に入れた力、いわゆる「程度の能力」だ。

代償がある代わりに超強力で山を分断する。しかし後先を考えず、全力で撃てば俺はすぐになんとかしないと死んでしまう程度に衰弱する。（吸血鬼の生命力でだ、普通の人間なら速攻死に至る）

まあ、今田はどうちらも見せてやろううぢゃないか。

諏訪子について行くよつに翼を羽ばたかせた。遅れないよつに飛んでいく。

久しぶりの感覚だが、体は鈍つていないようだ。これなら能力の方も大丈夫だろう。

この世界では、隠す必要もないんだ。存分に恩恵に授かるうぢゃないか！

「ついたよ、これだけ広さがあれば足りるかい？」

「ああ、十分だ。じゃあ早速見せてやるついでじゃないか

俺と諏訪子は広場の真ん中にいる。この広場、天然のものらしく人の手が入っていないらしい。広さも大体 $20 \times 20\text{m}$ くらい、十分だ。これだけあればある程度はできる。あくまである程度だが。

「じゃあまずは俺の力から見せよう。これが俺の紫黒しづくだ」

手で空を切ると、その手に現れたのは剣、紫とも黒とも言えない色をしており、生きているかのような生々しさと光沢を感じるものだ、一応金属ではあるが、感じられる異常性といつ面ではどんなものでも霞んで見える。

「なんだいこれ？ 見たところ無機物みたいだけど……」

「紫黒、無限に体積を変え、自在に形を変え、適応して質量を変えれる。これは俺の体の一部、左手の甲から出てきてるのはわかるが、詳しいことはわからない」

厨「全開だが本当にそりなんだ。紫黒は俺の自在に動く、いわば半身と言つてもいい。

この力のせいだ、俺の人生は狂つたが、今こうしていられるのなら安い対価なのかもしない。

「それじゃあむづつは危ないから、ちよつと離れて」

諏訪子は言われたとおりに少し後ずさり、まあ俺だってそっちの方には被害が行かないよう元気な顔で。

「これが俺の能力、「血を力に変える程度の能力」。自らの力の根源は、自らの血液という神秘性にある。吸血鬼にぴったりの能力だ」  
自分の血液の一部を消費、自らを取り囲む霧へと姿を変える。色は俺の紫黒と同じ色だ。

これも俺の左手の甲から発せられているためであつたが……詳しい理由はわからない。

そんなことを考えてこるついで、俺の体の半分が霧に包まれた。

「それが霧の地形を変える力かい？」

「ああ、これをこうすれば地面を掘れるぞ」

左手を前につけだすと、霧がかなりの速度で地面をこすりながら前へと進んでいく、不思議と音は聞こえない。

全てが通り過ぎると、ただ3m近く掘られた溝が、端が見えないほどここじこまでも続いていた。

「できる限り抑えてこんな感じだな」

「言葉が出ないよ、それできる限り抑えただって？ 私もそこまでやるのに結構苦労するのに……」

しかし、俺だつて左手の甲から血が出てきている、もうこの部分だけ痛みになってしまったくらいだ。

「とまあ、とにかくこれで一部だとわかつてくれればいい。それに俺にはまだもう一つあるしな」

コートの中から取り出されたのは魔剣ダーインスレイヴ、一度鞘から抜けば一度生血を吸い、誰かを死に追いやるまで鞘には戻らない、その一閃は的をあやたまらず、決して癒えない傷を残す。血を求める魔剣。

「これが俺が吸血鬼になったとき、最後の吸血鬼に選別をくれてやると言つてもらつたものだ、一度抜けば、生血を浴びるまで決して鞘には戻らない」

「よくわからないけど、とりあえず勝手に抜いたら あいけないのはわかったよ、けどまあそこまで力があつたなんてねえ、もつ私には理解しきれないよ」

そこまでなるのか、まあそれでいいのかもしれないが。強すぎる力は持ち主を滅ぼす。

そんなものは知識としても持つていらない方がいい、そういうの。とりあえず簡単にだが、俺の力はを見せた。これで納得してもらえるのだからこれでいいだろ。

「さて、これだけ見れば十分なんだろ? 戻ろうじゃないか

「そうだね、まあ飛びながらでも話は出来る

俺たちは同時に飛び立ち、平行になるように速度を保った。

「ねえ、どうしてそんな力があるんだい？」

「俺にわかつたら苦労はしない、だつたらとつに解決していくぞ、俺が人間を追われることなどなかつたよ」

「そう、何か悪いこと聞いたやつたね」

素直に謝る諏訪子、俺だつてあまり触れられたくないが、こいつち  
ではもう違うんだ。

確かに人間たち眼には異形に映つて、忌み嫌われるかもしれない。  
けれども、諏訪子たちみたいな存在にとつては何ともないんだ、幻  
想郷が出来てからは、本当に人間たちからも受け入れてもらえるん  
だから、それまでの辛抱だ、なにもう何千年か立てば時は来るんだ、  
それまで我慢すればいいだけの話、それに神や、妖怪たちは俺のこ  
とを認めてくれる、それで十分なのさ。

「なあ、神様やつててさ、人間の中に混じつていろいろできたらな  
とか思つたことない？」

「そりゃあるさ、私だつてずっと一人なのは嫌だよ。けどまあ今ま  
で何ともなかつたんだけどね、まあ正直に言つちゃえば一緒になつ

て騒ぎたいよ。ナビや、それが出来ないから信仰と恩恵という形になつたんだ。私はこの理を覆してまで、壊してまでとは思わない。だつてそれが眞の幸せにつながつてゐるんだから」

…… どうか、言われてみればそんな気がしなくもないな、俺は何か勘違いをしていた…… というわけでもないな、だつて俺のしてきたことは無駄ではなかつたんだから、人間に近づこうとして、それで人間という「ミミコニティ」から追い出されて、それでもここに来られたんだから。たどり着いたんだから。それでいいじゃないか。

俺は世界の理を変えるつもりはない、ただちょっとだけ自分が幸せになりたいだけなんだ。

「なんとなく、わかつた気がするよ。ありがと」

「お礼を言われる」と何かしたつけ? まあ素直に受け取つてえおぐね

「やひしてくれ」

俺は今日、一つの結末と答えを得た、けれどもそれが本当に正しいのかは誰にもわからない。

けどさ、ただ一つわかるのは俺のこれからの一生涯、とんでもなく面白そうだつてことだ。

なんだからって? こんなに素敵な仲間がいるんだぜ、それにわ

「なんだから」

「ねえ、帰つたら一杯やらないかい？」

「酒は久しぶりだな、よし乗つた、俺も賛成だ」

「じゃあ少し急いで」

夜空に一つの影が一閃した。

縁側から、月を眺めて一人で飲む酒、少し前までは考えられなかつた体験だ。

「ねえ、霧は神についてどう思つ？」

「神か？ 諭訪子みたいのが最初の知り合いだと分かんないかもな」

「なかなか言うねえ」

こんな風に俺は、なんだかんだいつて俺は、人間が大好きなんだ。神様だつて吸血鬼だつて大好きなんだ。

けど、ちょっとだけ歯車が噛み合わなかつただけ。けど、俺がそれに気が付くまでに、あとどのくらいかかるのかな？

「どうあえずや、これから一緒に暮らしていくんだ、よろしく頼むよ」

「それはいいからセリフだ、むしろいつが言つべきセリフだらう

確かにね、と諏訪子が笑う。俺もつられて笑う。

けれど今気がついた。とても重要なことを忘れていた。俺には笑顔なんてものまで、枯れていたのか。

俺は今、本気で心の底から楽しいと思った、そんな思いを込めて笑つた。心の底から今が楽しいと思つた、だからいつやって笑顔になれた。

だからいつして、また生きる気力がわいているんだ。

「それじゃあ、遅くなつたけど乾杯しよう、霧に、私に、この世界に

」「

「そうだな。俺もそんな気分なんだ」

もつ手をつけた酒だけど、乾杯をする。俺はいつしてこの世界に受け入れられた

## 男は自らの忌み嫌われた力を見る（後書き）

非常に能力紹介が急展開になつてしましました、まあこれから何度も出てくるものなのでこのくらいがいいのかもしれません。じゃないと、全部わかついたら面白くありませんし……まあこんなものだとわかつてくれればOKです。

ダーインスレイヴはそうですね、気になる方はwikiを見てください。まあ僕也要約して説明したんで、あれが分かつていればほとんど説明したようなものです。

これからは、素直に日常生活を書こうと思つています。  
諏訪大戦とかいつ出すか考えなきや……（汗

## 歴史は変わらなくても波紋は広がる

俺は夜を駆ける、それが俺の生き様だから。血を求める、それが必要なことであり、血らの糧となるから。そして、今新しい犠牲が生まれた。

「うん、鹿の血もなかなか……」

野鹿の首に口を当てて、食事を開始する霧。もうほん肉までおいしくいただく。

本当なら人間であった方がいいが、別に大丈夫なようになっている。それが二千年の歳月の力。力は強力になり、それと同時に臨機応変なものとなる。

これが毎日彼の食事、もうすでに諏訪子のもとに住み始めて早一ヶ月。特に代わり映えのない日常に退屈はなく、むしろ充実様で感じていた。

諏訪子の手合わせに何度か付き合つた。神の力は強力であるが、それでも二千年の歳月を覆すほどには至らない。ただし、これには？ ただし夜に限る？ という一文をつければの話だが。

「なんか、ただしイケメンに限るって言われて虚しくなるのがわかる気がする……」

確かに夜の帝王である彼も、昼間はただの妖怪にすぎない。それは昔から決まりきっていることである、人間さえも認識していることだ、いまさらどうこうしようとういう気持ちはない。ただ、何か知ら方法があるのなら別だが、それが起こり得ないことは、おそらくこここの世界の住人の誰よりも詳しいことだろう。それが彼の運命、すべてを知りえるものとしての定めなのだからどうしようもない。

そして今、今度は動物ではなく妖怪がその力の餌食となる瞬間がやつてきた

現れたのは妖怪、姿から察するに蜘蛛の妖怪、夜中に獲物を求めて徘徊していたところ、俺という標的を見つけたということだろう。

感じられる明らかな殺意は、捕食対象にしか向けられないものだった。  
ただし、相手が悪かつたけれども……

「久しぶりに、全力でお相手するか。一千年のうつぶん晴らしになるといいけど……」

期待はあまりできないだろう、力はあまり感じられない。

先手を譲らせてみる、蜘蛛らしく糸をはいてくるが……俺には無意味だ、そんなもの止まって見える。

紫黒を手に纏う、形は……大きな爪にしておこう。

糸を避ければ、全速力で本体へと接近していき腹を貫く。一連の動きは洗練されたものだが、その場の対応はできないだろ？、あくまで決められた型を再現しただけなんだから。

そのまま虚空へと抜けた霧の体は、今の成果などなかつたかのよくな素振りさえ見せた。

彼にとつては当たり前の結果なのだから、仕方のないことなのだが。全力を出し切る前に終わってしまった勝負を悔やむ様子はあるが、彼にはむしろそれでよかつたのかも知れない。それはなぜか？

「最近西日本の方が騒がしいらしいし、神様と戦うのならそちら辺の妖怪はオーバーキルの方がいいだろ？しな」

そう、最近西日本の方で次々と先住の神たちを破り、配下に従えているという国があるという話を聞いた。間違いなく神奈子のこところに違いない。

もうすぐ諏訪大戦が始まるということだ。

おそらく自分が加担しても、結果は変わらないようになっているのだろう。けれども今までの諏訪子に借りっぱなしの恩を返すにはこの場しかない。

自分が参加し、できるだけの戦果をあげることで、洩矢神の評判をあげるくらいは自分にもできるだろ？。おそらく一番奮闘した神として歴史に名を残せば、諏訪子もまあ、悪い気はするだろ？が満更でもないだろ？。

そのため、自分が大戦に参加し、歴史を覆すぎりぎりのことをする  
のは俺の中では最早規定事項だ。つまり神奈子に対応できる力がほ  
しい、そのためにはそこら辺の妖怪などはオーバーキルでいて、な  
おかつ強敵との戦い方を磨かなければならぬ。なかなかに複雑な  
悩みだが、自分には力がある、おそらくぶつけ本番で慣れていく  
という戦法もありっちゃあり、というわけだ。まあそれが意味する  
ことは一つではないのだが……

要するにだ、神奈子と戦うにしても別に戦い方というものを身につ  
ける必要はないが、その代わりに現地で対応法を習得しなければな  
らない。

もしかすると諏訪子と神奈子の頂上対決という可能性もあるわけで、  
この根回しはすべて無駄になる可能性もあるが、おそらく神奈子の  
味方の神様は貧弱ではあるまい。

まとめると、今の自分に必要なのは対応力だ。それだけだ。

こんなに長々と俺の戦略を読者の方々に話させてもらつたがそう言  
うことだ、まあ無駄にはなるまい。

とにかく、もうすぐ諏訪大戦がはじまるということは間違いないの  
だ、それなりの蓄えも戦力も諏訪子は用意してある、ミシャクジ達  
の強さはわからないけどもそれなりの戦力にはなるはずだ。  
せいぜい負け戦を全力で行うとしよう。恩人の名誉のために。

「さて、もうすぐ夜明けだし、諏訪子も起きてくるだらう。それから神社に参りますか」

今日も一日が始まる  
いや、もうひん俺にとつては終わるだよ。勘違いしないでくれよな。

帰つたら諏訪子がもう起きていって、そのことについて少し話したが、  
まだ先のことだと思つていいようだ。  
それもそうだらう、だってまだ噂が広まつてへる程度のことなのだから、騒ぎからほほ遠いということだ。

とにかく、俺は既に就くことじや。

「あー、霧も寝ちゃったし暇だなあ

縁側に座り、足をぶらぶらさせる諏訪子。神の威厳など感じさせぬ  
ここもなかつた。

しかし、戦が確実に迫ってきているなかでの戦力強化という面の仕事はなにも怠っていない。既にミシャクジ達もいざ戦が起これば戦つてくれるよう約束してある、それは諏訪子に対する信頼の表れか、それともただ自分たちの居場所を守りたいだけか？ それは誰にもわからないことだ。

「お？ 参拝客じゃないか、朝っぱらから熱心だねえ」

ヒツセツとのぞき見をする諏訪子、神がそんなことしていいのかは知らないが、それでも好奇心には勝てないようだ。

「どんなこと話しているのかな……？」

「国境の方の村から聞いた話なんだけどさ、隣の国までついに占領されたらしくよ」

「はあ、それじゃあ西日本はほぼ全滅だなあ」

「そうそう、神様がなんとかしてくれないかねえ……」

……隣の国まで？

自分が思つていた以上にことが進んでいたことに驚きを隠せない、また、ここまで迫つてきているにも関わらずあちからのことは何もつかめていない、それがどれだけ恐ろしいことかわかっている諭訪子は、眠りについたばかりの同居人にそのことを告げに走る。

強引に畠を覚ませ、寝ぼけ眼の霧に全てを話した頃にお互いの考えは一つにまとまっていた。

そう、ミシャクジ達にこのことを伝え、全面戦争の準備を今すぐ行整えること。

自分たちは貴重な戦力であると同時に、決してかけてはならないまとめ役なのだ。その任務をこなさなくてはならない。

明日にでも諭訪大戦があ始まる、霧はそつ認識した、おやうく相手は奇襲を作戦としているはず、ならば畠には畠を、逆にこちらがしてしまえばいい。

けれども堂々と宣戦布告をしてきたならば、こちらも全力で対処する。

いつの間にか諭訪子はどこかに行ってしまった、おそらく国境にミシャクジ達を集めるためだろう。

今日の夜にでも俺も移動することになる、準備ぐらいは済ませておこう。

とはいってもそんなのはないんだけどな、せいぜいたっぷり寝ておくとしようか。

それから諭訪子が返ってきたのは、夕方のことだった。

そして夜が更け、零時を回った後に俺は諏訪子にこのように伝えられた。

まず、夜になつたら国境に自分たちも移動する、相手は人間以上の存在らしいから、こちらもミシャクジ達と俺たち一人が全戦力になるということだ。

そして夜の間に、俺には神奈子たちがいつごろ攻めてくる探つてきてほしいとのこと、おそらく俺単体を送り込むということだろう。見つかつた場合はこちらからの宣戦布告でも送つておけとのこと、要するに奇襲の線をなくしたいわけだろう、それが諏訪子の考えた戦略なんだから文句は言わない。

要するに、夜限定の俺の強さを十分に利用するというわけだ、十分な戦略家ではあるのだろう、単純だが、使えるものはすべて使う精神は称賛に値するものだ。

とにかく今夜が決行の日だ。もう既にあたりは暗闇に包まれている、俺の準備次第でいつでもいいらしい。

「じゃあ今すぐこでも言つてこやつ、早い方がいいんだろ?」

「悪いね、それじゃあ幸運を祈るよ」

俺は返事をせずに飛び立つた、しかしこのままでは見つかる可能性も大きい。

俺の気配は夜に紛れる、気配遮断と同じような感じで見ていいだろう。それでも念には念を入れておくのが一番だ。

まあ、俺の五感は夜にはより一層冴えることとなる、相手がこちらを見つけるのより先にこちらから相手を見つけられるであろう。

それよりも怖いのはこいつが侵入してからだ、神奈子のような力のあるものまでごまかせるか？ それはもうかけでしかないであろう、とにかくやつてみなければわからない。

そのまま迂回すれば気づかれることなどあるまい。  
さて、早速大きい気配を見つけた、しかしこちらに気づいている様子はない。

このように、俺は確実に本丸へと移動する。本丸とはいっても拠点は一つしかないわけだが。

そして俺は本拠地までたどり着いた、中には神奈子の姿も見える。俺は近くの木の枝にとまり、できるだけ気配を小さく保つ、不特定

多数の人間から逃げてきた俺にとってのこれらはお手の物だ。

そして丁度行われている会議の内容に耳を傾ける。

なんでも明日の日が明ける前に攻め込んでくるようだ、今の時期で言つたら大体日の出の一時間前だらう。俺にとって若干有利な時間である。

その後も話の流れを聞いた、その他には特にひりひりの利益となつてゐる話はなく、そのままお開きとなつた。

そして部屋には神奈子だけが残され、俺もそろそろ帰るとするか。

俺は再び空へと駆ける、十分もあれば諏訪子のところに戻れるであろう。

俺が戻ると、諏訪子はすぐに結果を聞いてきた。

「明日の朝、日の出の一時間くらい前に攻めてくるやうだ

「そう、だったらまだ一日あるし余裕もあるみたいだね。とにかく、あとのことは私がやっておくからもう休んでいいよ

「わかった、じゃあそいつをせてもいいよ

さて、ちよっと早いけど寝ておくか、じつは「田中戦」ひとつないかもしないんだから。

さて、決戦は明日なわけか。せいぜい頑張るとするか

## 大きな戦いは大きくも小さい結果を生んだ

決戦の時はもう一時間以内にやつてくる。たつた今諏訪子に起<sup>ハシ</sup>され、そう言われた。

どうやら思<sup>ハシ</sup>いのほか寝ていたらしい、確かにもうあたりは真<sup>ツ</sup>暗、ほぼ丸一日寝ていたと言われても納得できる。まあ速攻起こそされたという線もあるのだが、さすがにそれはないだろ<sup>ウ</sup>。

しかし吸血鬼の体のリズム<sup>ハシ</sup>てのはおかしいもんだ、早寝早起き（朝寝夕方起き）の練習でもやつとかないとダメかもな。  
まあ今日に限<sup>ハシ</sup>ては好都合なわけだけれど。日が昇<sup>ハシ</sup>つたら俺は半分無力化される、それまで万全で動けるのならばそれでいい。一応一番の戦力なんだからな、夜限定の。

「諏訪子、本当に先手を譲る気か?」

「うん、向<sup>ハシ</sup>こ<sup>ハシ</sup>は完全な奇襲だと思い込んでるはずだから、だつてひつひを探るようなことは言つてなかつたんでしょう?」

確かに、それもそうだけど。

「私は直接大将を狙<sup>ハシ</sup>いに行くから、霧はとにかく暴れて頂戴」

諏訪子と神奈子の一騎打ちつてわけか、そうなりそ<sup>ハシ</sup>だとは思つたけどな。

「まあとにかくついてきて、何があつてもすぐに対応できるよ<sup>ハシ</sup>うしなくちゃならないんだから」

とにかく、作戦は諏訪子任せなんだから文句は言えない。俺は諏訪子にできるだけ手を貸すことしかできないんだから。

それから三十分ほどたつた今、ついに時は来た。

向こうの軍勢には神々しさというか、すべてをひれ伏させるようなオーラがある。おそらくあれが神力である。つまり、オール神の軍勢というわけだ。

こちらも一応祟り神なんだけど……どちらも一線を越えている雰囲気がする。

そして、俺たちの計画にも狂いが出てきた、それは……

先陣を切つてこちらに向かってくるガンキヤノン……あれを神奈子と言わずに何という。

そう、まさかの大将が先陣を切つてきたのだから驚きである、それは自信の表れか、無鉄砲さか。おそらくは前者であろう。ここまで無敗の実力は決して馬鹿にはできないはずだ。

「諏訪子、何となく雰囲気でわかつてるのは思つが、あいつが大将

だ

「たしかに一番力がでかいねえ、じゃあ私はあいつを狙えばいいんだ

そうこういふことだ。

「じゃあ行つてくぬよ、そつちもくまするんじゃないよ！」

あたりまえだ、吸血鬼なめると痛い目見るわ。

さてと、俺は適当に片つ端からぶつ倒せばいいんだな、守りの方はミシャクジ達がなんあとかするだらう、俺は数を減らすのが一番の仕事だ。

さてと、俺も出陣と行くか。

怪物が、解き放たれた。

迫りくる神々の軍勢に俺が先陣を切つて立ち向かう。ミシャクジ達

も俺の破壊力は聞いているみたいだから全力を出してかまわないだ  
ろ。」

向き合つた軍勢、一発目は俺がぶつ放す。

俺は左手の手袋を脱ぎ、体に霧をまとつた。手の甲からは少しばか  
り血があふれる。

けれどもそんなことを気にしたりはしない、あくまで初撃を成功さ  
せることに集中する。

そして解き放つ、俺の破壊の霧を

それは全てを削り取る、すべてから削り取る。向こうの神々には悪  
いけど、本気を出させてもらひ。俺の一千年間の集大成をここで出  
す。

破壊が始まった。

「なんだいなんだい、力のある奴がいるじゃないか。これは楽しみ  
がいがあるねえ」

「ふん、あなたの部下たちなんか速攻かたづけられてこっちにくる  
よ、降伏するならいまのうちだね」

空に向き合う二人、誰も邪魔は入らない。いや、入れない。  
それほどまでに大将戦は他の神々の戦いとは次元が違うのだ。

無音が途切れた時、が戦いの始まりである、そして静寂は途切れた。

「とつやああ――――――つ！」

「はああああ——つ。」

オンバシラが飛び交う、諏訪子はそれを縫うように避けながら確実に接近していく。

無同二〇四

神同士の争いは実力的には互角  
どちらも譲らなし

た。 異度のやりとりが交わされただろう。一騎打ちは壮絶なものとなつ

オンバシラが諏訪子に幾本も向かう、それを諏訪子は土や岩などを使い、盾にしたり反撃したりなど、様々な駆け引きがされている。

そして一本が諏訪子の岩の盾を打ち碎く、それを慌てて避けた後、破片により身を隠しながら反撃をする。

いつしか神奈子の背後にはいくつもの岩が投擲されていた。それにギリギリまで気がつけなかつた神奈子は慌てて背後にオンバシラを投擲し、相殺していく。

けれどもそれは諭訪子に體中を包むるといふと、そこで登場したのは洩矢の必殺兵器。

「ぐりえ、鉄の輪！」

諏訪子の周りから、次々と形成され飛んでいく鉄の輪、これには神奈子も回避行動をとるが自然と劣勢に傾いていくのは必然である。

諏訪子が勝利を確信したその時、形成は変わった。

神奈子が蔓を出したのだ。

蔓は鉄の輪をからめ取り、同時に諏訪子のところまで伸びていく。自慢の鉄の輪も一度勢いを失えばただの鉄の塊だ。

勝負はわからなくなつた。

ミシャクジ達は置いてきた、自分一人でどんどん敵中をぐぐりぬけていく。

あるものは紫黒の餌食に、あるものは能力で蹴散らした。それでも彼はまだ、血を求める魔剣を抜いていない、いや、抜く気はないだろう。そこまではしなくて自分は大丈夫、そういう絶対的

な自信があり、事実があつた。

しょせん神奈子以外の神などこんなもの、中には力の強い神がいたが霧のなかに消え去つた。

そこは彼の独壇場、邪魔する者などいなかつた。

「畜生、諏訪子は劣勢か」

こちらが回ることもできるが、それでは今度正面突破が防げなくなってしまうかもしれない、俺の目的はできるだけ拮抗した負けを用意すること。そのためにはどちらがいいか……もちろん敵の数を減らすことだ。

次の軍勢が来る、一人目が切りかかつてくるが、俺はそれを紫黒で受け流してそこから帰りうつにする。

つぎは紫黒を変形させ、ハンマーのようにして一人ほど叩き潰した。まあ神様はこんなことでは死なないが、さすがに戦闘不能になるだろう。

固まつた相手が来たら霧を使う。吸血鬼にとって血というものは特別な意味を持つ、そこで俺の持つ血を力するという能力はとんでもない強さとなるのだ。

もちろん俺は軽めにはなつても、受け止める側にとっては必至、それでも蹴散らされてそこらじゅうに舞つて行く。

このままではきりがないので、大きく控えている後ろの軍勢を丸ごと潰してしまおう。

「吹っ飛べ！」

左手の流血がひどくなる、けれどもこれくらいなんでもない。

そして渾身の力を込めて放たれた一撃は、後方に構えていた敵の軍勢の半数を消し飛ばした。

けれどもミシヤクジ達の力はたかが知れている、それに半数とはいっても元の数が違いすぎるのだ。相手の方が人数はまだ倍以上はある。

このままではまだ劣勢だろう。俺がなんとかしなければなるまい。そりでなくては負けるんだから。

「それで終わりだって言つんなら興ざめだよ」

「まだまだこれからだよー！」

とはいっても鉄の輪がすべて防がれている状態でどうやって巻き返せば……

唯一の勝機は、鉄の輪を防いでいる間はいかにも攻撃する余裕がな

いことだけど、それなら攻撃を続けて機会を待つしかないみたいだね。

とにかく全力で、あの蔓の防御を抜ければ私の勝ちなんだから！

しかし、諭訪子は自分の頭上に迫るオンバシリに気がついていかなかった。

霧は驚愕していた、突然諭訪子が撃墜された。  
そのとき取った行動は一つ。彼は諭訪子を受け止めるために翼を広げた。

結果的にそれは間に合つた、諭訪子を受け止めた霧は神奈子を見つめる。

「おや、主催の登場かい？」

「よくわかつたじゃねえか、俺が一番力があるって」

諏訪子をミシャクジに預けると、俺は神奈子に立ち向かう。おそらくここで勝っても負けても結果は変わらない。けれども、圧倒的な力の前に半数を削るも敗北。よりは大将を倒して惜しくも敗北の方がいいじゃないか！

緊迫した雰囲気ができる、俺も神奈子もビビり一発勝負で決着をつける気らしい、俺としては助かった。もう俺には時間がない。

「じゃあどっと決着つけとこよつか」

「望むところだね、むしろそのまま逃げるんじゃないかと思つたけど……どうやら本気で来るらしいね」

俺も神奈子も既に力をためている。そしてその力は解き放たれた。

俺の霧と、神奈子の蔓が互いに一步も譲らない進展を繰り広げている。

俺の左手の甲はすでに真っ赤に染まっていた、これはさすがに終わつたら狩りにでも行つてくるか。

お互に一歩も譲らない、俺だってこれ以上出力を上げたら衰弱して戦えなくなっちゃう。さすがにちょっと調子に乗りましたか……

そしてしばらく続いたこの勝負、決着の時がやつてきた。

「残念、時間切れだ」

「どうこういとだい？ まさか今更逃げようって魂胆じゃないよね？」

「違う、田の出だよ」

そう、地平線から少しづつ、光が見える。このままでは俺は灰になるだろう。

俺は攻撃をやめ、蔓の猛攻を避け切ると口傘をさした。

「俺の負けだ、時間内に決着をつけれなかつたからな」

俺が離れてからの勝負は一気に形勢逆転があつてみていう方も驚かされた。

俺一人の影響力といつものがどれだけすごいのか、初めて実感できただのかもしれない。

結果的には負けた、神社は歴史通りに神奈子のものとなり、すべて収まった。

諏訪子も最初はあーだこーだ言つたけど、最後には納得して神社を明け渡した。まあそれでも神社に神が一人いる状況になつてゐるだけに、決着としては珍しい方法なのかも知れない。

まあ結果としては同居人が一人増え、諏訪子が暇になつて、信仰は神奈子が受けた。もちろん諏訪子を信仰する人もいるが。とにかく、俺の生活はほとんど何も変わらない、あれほどの争いがあつたとしても残るのはそれだけなんだ。

神と神とは言つても、所詮はそこまでなのかもしれない。もしかするとそうなるように仕組んだのかもしれない、それは誰にもわからない。

そして今俺は、三人で食卓を囲んでいる。これだつて事実を知つているから驚かないが、普通の人間視点から見たらかなりシユールなことになつてるんだろうな。

「あつ、神奈子、それ私の魚!」

「なにおう、早い者勝ちだい」

「人の皿にのつてるものは早い者勝ちなんかじゃないよ!」

……騒がしいです。

けど、これが俺の望んだ日常なんだ。なんだかんだいって、俺はこ

うして受け入れられていくんだから

## 力という大木は確実に枝を伸ばす

「やつぱり格好いい方がいいんじゃない？」

「けどわかりやすさも大切なんじゃないのかねえ」

「俺としては気合いが入るというか、ズバッと決まる名前がいいな」

「それは言えるねえ、諏訪子、言いだしつへなんだから何かいいのだったらどうだい？」

「神奈子だつてさつきからダサイのばっかじゃないか、ネーミングセンスも何もないじゃん」

「使ってる本人がそんなもののかけらもないんだし、案外シンプルに攻めてみない？」

えつ、今何をしてるのかつて？ 名前を決めるんだよ。理由がわからぬいなら……ととりあえずこうこうことがあつたつてことだ

俺は「血を力に変える程度の能力」を持つている、しかし俺はそれを全然生かそうとしている、霧を出すことにしか使っていない。

それではもつたいたいないじゃないか、といつ意見を諏訪子から頂いた。

確かに、俺は能力よりも紫黒の方が使いやすくてそちらに頼り気味だ。誰だって進んで大小のあるものを使おうとは思えないだろう。それに、余計なものまで壊してしまったから嫌なんだ。その点でも優れているのだから使い勝手的には最高なんだ。

「しかしなあ、新しい使い方なんてどうやつたらいいと思つ?」

「私に聞かれてもねえ、霧が一番わかつてるんじゃないの?」

神社の」とはすべて神奈子がやるよつになり、必然的に諏訪子は暇になる。

なので暇つぶしも兼ねて俺の能力強化に付き合つてもらつているわけだ。

しかし、俺も本当に自分の能力がどんなものなのか理解しきれていない、大雑把な能力ほどそうなるらしいが……べつに俺の場合用途は限定されているためにそうでもないはずだ。

「たとえばさ、どんな力に変えられるのか試してみたらいいんじゃない? いつもとは違う風に能力を使うとか」

「なるほどねえ、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるといつナビさ。確かにその通りかもしねないねえ」

「やつこつ」と

なるほど……とりあえず軽く霧を出してみる。これくらいなら血も出てこないし痛くもない。

ここからどうにかして別の要素を加えるわけだけど……別に他の使い方があると決まったわけでもないのに気が遠くなる話だ。まあ時間はたっぷりあるのだし。何とかなるだろう、ならなかつたらそれが結果だ。

「とにかくやってみることにする、危ないから一応離れて」

諏訪子が俺から離れたのを確認すると、早速取りかかる。

手探りで力の出し方を変えていく、けれどもそれは霧の発生が不安定になるだけで何の効果もなかつた。

それでも思いつく限りのパターンを試してみる。俺に靈力や妖力があつたなら話は別だが、残念ながら諏訪子曰くそんなものはひとかげらもなく、逆に珍しいらしい。

なんでもどんなに小さい量でも人間には靈力が、妖怪には妖力が、神には神力があるらしい。俺には全くないそうだ。

これは諏訪子の推測だが、俺の紫黒がその代わりを果たしているのではないかということ。

たしかにこれは俺が生まれつき所有していたものだし、その可能性はゼロではないのかもしれない。

話をもどそう、俺に靈力や妖力があれば、それを使って工夫をすることができる、けれども俺にはそんなもの全くないために紫黒を組み込むか、能力の使い方を一步変えてみるしかないのだ。

そんな選択肢のない状況でなんとか新しい力を見つけるのは、逆に簡単というべきか逆に難しいというべきか、もしくは素直に簡単か難しいか、それはわからない。

とにかく、俺が思いつく限りのパターンを試していくだけだ。

諏訪子は自分の背中に冷たいものが通るのを感じた。  
なぜだかはわからない、ただ神の勘が危ないと、そう言っているのだ。

思いつく理由は一つしかない、それは霧。  
もしかすると目覚めた新しい能力はとんでもないものなのかも知れない、または使い方がわからずに全力で放てば……どうなるかはわからない。

諏訪子は本能に任せて逃げ出した。そしてその瞬間、黒く紫な炎が  
その場を包み込んだ。

諏訪子は一歩遅かつた時の自分を想像し、今度からはもっと離れよう  
うと心に誓つた。

「これは……紫黒と同じ色の炎、つまり俺の能力でいいのか

自分でも驚愕している、失敗を前提で繰り返していおた作業で成功  
を収めたのだから。

一度出してしまえばあとは楽だ、自在に炎が出せた。

遠くに避難した諏訪子の姿を確認し、炎をしまった後、手招きをした。

不思議と、すべてを飲み込みながら進んでいた炎は跡形もなく消え去つた。

霧も炎も自在に出せる、けれども同時には出せない。もう少し練習すればどうにかなるのだろうか。

ともかく不自然なことが一つだけ、それは確かに燃え残った灰がその場にあるのにも関わらず炎だけが消えたこと。ますます自分の能力がわからなくなる。

しかしその思考は諏訪子の声によつて中断させられた。

「いやー、とんでもないものが眠つてたじゃないか」

「俺も驚いてるよ、ともかく新しい力と言つのは素直に喜んでおこう」

こんなに簡単に見つかってしまった俺の力、もしかすると俺もまだまだ成長する余地があるのかもしない。

「じゃあさ、名前考えようよ名前、いつまでも無言で使うよりその方がいいでしょ」

「たしかに言われてみれば名前もつけてないな、たしかに不完全燃焼と言うか、名前があつた方が使いやすいといつも気持ちはある」

「（だつてその方が格好いいし）」「

「（名前言つた方が行くぞつて感じが出るな）」

「うして俺の技の名前を考えることになりました、はい、時系列元に戻ります。

とまあ、神社のテーブルを神一人と吸血鬼で囲んで何を話しているのかと思つたらそんなことなんだ。けどまあ俺にとつてはある意味死活問題でもあるわけだしな、これからずっと付き合つていくことになるわけなんだし。

「やつぱり紫黒とあんないじ色をしてるんだし、紫黒なんたらとかどうかな？」

「けどもねえ、まあそれはそれでいいんじやないかな？」

「ういう話し合いがだんだん適当になつてくるのはおそらく必然であろう、だつて実際に本人だつてつまらないんだから。まあもつと自分の技に責任をもて、とか言われたらそうなんだけどさ、だつて正直かつこいい名前があつたつて格好良く見えるのかは俺次第なんだろ？ 正直俺は何事も名前は一の次だと思うんだ。

「思つたんだけどさあ、全部素直に紫黒にしちゃつたらいいんじや

ない？」

……なるほど！ シンプルだけどいいかもしない。

「俺はそれでいいかもしない、だつてこれだつて紫黒と同じ色なんだし、シンプルでしかもひとまとめにできるなら」

「なるほど、あくまで原点は同じ……私もそれでいいとは思つナゾ！」

「じゃあ決定！ 霧の技は全て紫黒でくくられることになりました！」

はい、なんともパツとしない理由で俺の技の名前は決まったのでした、えつ何？ 前と変わってないじゃんつて？ 別に俺は気にしないからいいんだよ。

なんともいえない微妙な空気になつてるが、とりあえず決まったものは決まつたんだ、本人の同意の上なんだからそんな微妙そうな顔しないで、二人とも。

しかしこの微妙な空気を取つ払つ方法はただ一つ……

「ねえ一人とも、そろそろご飯にしない？」

今思い返せば、俺食事は自分一人で済ませてるんだよな、このときは本当に失念していた。

ええ、見事に悪い方向に進んじゃいましたよ。文句あるんですか？

ともかく、俺はめでたく能力全般は紫黒と並び名前になつた、と言つことで少し進展したことがある。

使い慣れた名前でも、やっぱり名前が付くと霧にしても炎にしてもイメージがわきやすい、これが固有名詞の力なんだろうか？ ともかく、何か形が決まつたような感じがする。

名前を付けると愛着がわくというつが、それに近いものであるうか？

縁側で諭訪子と話しながら考える。

「なあ諭訪子、俺の力って未知数じゃん、だからそのうち旅にでも出てみよっかと思うんだ」

「これなつづいてそんなこと？」

「いや、ただ単に世界を見たいんだよ。自分がこれから迺ごしていく世界がどんなものなのかとか、まあ単純に力を伸ばすところでもさ」

俺もよくわからないんだ、自分がどうしてこんなこと思つたのかなんて。

「別に私は止めないよ、霧の好きにしたりいや。ただし、ここはいつか戻つてきてくれるんならね」

その言葉の奥の意味を、霧に理解することは不可能だつた。おそらくそのままの意味でとらえたのだろう。

「私も止めはしないぞ、別に旅なんか男なら誰もが憧れるものなんだろう？ それに、霧の人生は霧が決めたらどうだい？」

「神奈子もそう言つてくれるのな…… そうだね、何か機会があれば本当に行こうと思つ。まあそれまでは世話になることになるから、みろしく」

諏訪子が今日はもう寝ると言つて無言で寝室へと向かつて行つた、俺は特に気に留めず、お休みと言つた。

「（ ）」

諏訪子は一人、布団の中を考える

後に残された霧と神奈子、先に口を開いたのは神奈子だった。

「もし旅に出るのなら土産は期待してよ」

「期待されておくよ、まあ期待に添えるかどうかはわからないけど

たつた一言ずつの言葉で、お互いはお互いの意思を読み取った。それは一人だけの約束、けれども神奈子は諏訪子の気持ちは何となくわかつていた。

霧はわかつていなかつた、それだけで、とても大きいそれだけでたつ一つのとても重要なことだけは伝わらなかつた。

「じゃあ私もそろそろ寝るとするかな」

「じゃあ俺はひとつ飛びしてくるよ、まあ長ければ何百年かはここにいるわけなんだから、そんなにすぐのことでもないしあせらず考えようよ」

「それもそうだ、じゃあ私は寝るからね、お休み」

俺が返事をする前に部屋の中に入つていつてしまつた。

じゃあ俺はこの後も能力の練習とかしてみようかな。もしかするとこの調子でなにか新しく見つかるかもしれないし。

俺はつこさつき炎を出したばかりの広場へと向かつた、まあ徒労に終わるのかもしれないけれども。

俺も原作キャラには早く会つてみたいし、そのためには力をつけておかないと。世の中何が起こるかわからないしね。

## 神をも説めはれぬほひ女の話

昨日俺はいつか旅に出る宣言を出した、とはいってもきっかけがあればの話だけどな、俺的には昨日の夜に思ついた、平安時代になつたら輝夜に会いに行くというプラン、とまあなんとも気の長い話だが、を立てている。まあ吸血鬼の寿命から考えるとそうでもないのかも知れないけれども、といつか何年生きられるのかわからん。誰か教えてくれ。

とにかく、現在は弥生時代あたりなんだから……まあだいぶ遠いのは確かだ。

つまりそれまではここに腰を据えるということだ。

要するにそれまでは一ート生活を満喫するってことだ。

しかしそまだ日が昇つっているうちに起きてしまった、俺は暗い部屋から出て行けないし、諭訪子や神奈子が来てくれないとなんでもなく退屈なわけで、今は紫黒を使って等身大諭訪子作りに挑戦している。とはいっても念じるだけで大体はできるので、細かいところの調節だけだ。

この際ゆつくり諭訪子とゆつくり神奈子……いや、本人たちの名前とストレスメーターのために止めておくか。素直にこれで満足しよう。

でもちょっとだけ作つてみたり……  
ゆつくりしていってね！

俺はなんだか嫌な予感がしたので作業を中断した、ともかく暇つぶしは等身大諭訪子で事足りるだろう。

縁側に座つて、ため息をつく諭訪子に不意打ちで声をかけてみる。

「ねえ諭訪子、あんた霧に気があるんだり？」

「ふはつつー なんてこと言つのを神奈子」

お茶を盛大に吹きだしたね、その反応は図星なんだろ。見ててそれらしいとは思ったんだよ、霧がいつか旅に出るつて言った時のリアクションとか他にもいろいろとね。霧は気がついていいみたいだけどねえ、まあそんな経験なかつたみたいだし、女の仕草をどう捉えてみたらいいかわからないって言われても納得はいくさ。

けど私の眼ばこまかせないよ。

「霧のどこのかいんかい？」

「私にもわからないよ、けどか、何か気になるんだよね」

それを世間では好きつて言つんだよ。

「こつその」とアタックしてみたりついだい？」

「考えてはいるよ、けどきつかけがつかめないと」うかね

「好機を逃したら一生回つてこないかもしないのに、早めにすることに変わりはないね」

私達は神だけじさ、考へることは人間と何も変わらない。こうやって恋の病に悩むのだつて人間と同じなんだ。神だからつて答へがすぐ出るつてわけじゃない。

それに、難しい問題なのも本人はわかつてゐるんだろう。理由はまごめきれないくらいにいろいろあるさ。それこそ文章に表しきれないくらいにね。

まあ私が口をはさんでいいかと言われても、微妙なところなんだけどさ、まあ応援はするよ、曲がりなりにもこいつして話し合える立場にはあるんだしね。

同居人の幸せを祈るのは当然じやないか？

「じゃあさ、神奈子は好きな人ができるだらうする？」

「私？ そうだねえ、とつとと告白ちまつかなあ、玉砕しても成立しても後悔はしないと思つさ」

「それは神奈子が強いからでしょ」

「弱音はいてんじやないよ、いつもの強気な諭訪子は何処行つたんだい？」

聞いた話ではまだ出合つてから一ヶ月ほどしか経つていらないらしいけど。本当にわからないものなんだね、それだけ霧の魅力があるのか、それとも……

とにかく、私が言つてやれることはただ一つ。

「諏訪子は諏訪子で攻めなさい、そりしないと落としたって意味がないからね」

私は返事を聞かないうちに退散することにした、今日も色々仕事は残つてゐるし、本当にうれしい忙しさだしね。

まあ一人の関係がどうなるか、気にならないわけじゃない。けれども私は自分と言ふ立場から、何をすればいいのかわかつていつもりだし、気長に構えるぞ。

さて、変に諏訪子が固まっちゃ わなきゃ いいけどね、そんなことになつたら後味が悪いし。

何より私が一番気まずいじゃないか。

「はあ、じつすればいいのかなあ

本当に心から思つてこる」と。それは伝えるべきか、それとも「のまましまいこんでおくべきか。

本当に迷うね、もし霧が受け入れてくれたとしても、それで霧を縛り付けちゃうようなことになっちゃうのだけは嫌だしね。

なんとかなるって信じるのは勝手だけど、信じられた結果は裏切る

のも勝手なんだ。どうなるのかなんて誰にもわからない。百パーセントなんて空想の産物なんだ。そんなものは、ただの偶然の産物で、現在の過程を示しているだけのものなんだから。それがいつ覆されるのかなんて、それこそ神にもわからない。

それこそ私だってわからないんだからさ。

ほんとうにどうしたものか……

とのかく、今日は普通に接してみよう。そうやって少しずつ決めて行けばいいんだから。

確かに時間は長いようで短いんだけど。それでもなんとかできるといひまではやつてみようと決めたんだからね。

「おーい諭訪子、ちょっとこれ見てくれよ」

これは霧の声、ああそうだね、もう日が沈んでるじゃないか。私としたことがこんなことにも気がつかないなんてね。

とにかく普通に接する……それで何の用なんだう?

振り返るとそこには等身大の私がいた。

「かなり上手に作ったつもりなんだけど……どうかな?」

「本人が驚くくらいに精巧にできてる」

ああそりだ。この調子じゃないか。焦らずになんとかして見せないとね。

なんだか諏訪子の様子がいつもと違つたような気がするナビ……別に気のせいかな？

今はいつも諏訪子なんだし、俺の氣のせいであらう。そんなこと気に病む必要なんかない。

けども等身大諏訪子のクオリティーが高すぎる、これが紫黒の全力なんだろうか？

これはいろいろ試しがいがある、もしかすると戦闘にも応用できるかも知れない。いろんな形作れる方が便利だしね。

けども、一つだけ感じることがある。それは諏訪子から感じられる神力が最近減つてきているということ。どうしてだろうか？

ただ単に隠しているだけかもしれないし、他に理由があるのかもしれないけども俺には分からない。

まあ話したい時が来たら、俺にも話してくれるんだろう。余計な詮索はしないさ。

ただ……やっぱり私の力は減つてゐる、神奈子に信仰が行くよつにな

つて、私の信仰が薄れてきてるんだ。

まだ減つてきているだけでなんともないけど、いつかは消えてしまうかもしれない。

まあ本当に気が遠くなる話だけど……活動する力も足りなくなつてしまふたきりになると、それくらいにはなつてしまつだから。

時間はたくさんあるけど無限って言ひわけじゃないんだ、それなりの覚悟は決めておくつもつださどねえ。やつぱり思いを伝えるにしても早め早めがいいことかな……

ただいつにしようかねえ、それだけが本当に悩みさ。  
まあこっからは自分に頼るしかないとことかな。

「諏訪子、なに魂抜かれたような顔してんのさ」

「ああ悪いね、ちょっと考え方してた」

「諏訪子らしくない、とにかく俺は今日も食事していくから」

そう言つてまたどこかに行つてしまつた。今から追いかけても追いつけないよねえ、だつて普段一緒に飛ぶときだつて向こうはだいぶ抑えてくれてるんだから、やっぱり曲がりなりにも吸血鬼なんだね。

「神奈子、覗き見は良くないんじゃない？」

「なんだ、あなたのことを心配してやつてんのに。あととかくこの調子でいけば？」

「やつれせてもひづみ、まああなたの言つ通りなかもしれないしね」

二人は無言で見つめあひ、言つたことはそれですべて伝わったようだ。

「あ～、どうかとんでもなくおこじい血の鹿でも歩いてないかな

」

そんな神×2の気持ちになんか全く気がついていない霧は、今日も今日とて獲物を探す。

「しかしなあ、本当に最近諏訪子の挙動がおかしいような気がするんだけど……別に早期にかけてるとそうでもないんだよなあ

つぐづぐ鈍感である、まあ彼の生涯はこんな体験とは程遠いものだつたために、翔がないと言えばしょうがないのだが。誰かを好きになつてる暇があつたら他のことをしなければ生きていけない様な生活だったのだから。

「うへん、確かにかぐや姫つて平安時代の話なんだし、それまでできるような暇つぶしでも考えないといけないなあ。なんか彫り物でもやってみるとか……いや、俺に会ってないし、紫黒の方が何かしてて楽しい。それよりは新しい能力見つけたほうがいいのかもしないなあ」

とりあえず修行でもしてみるか、と勝手に結論を出しておく。実際それ以外にすることがあまりない。

せめてボードゲームの一つでもあつたらいいのになあ、この時代でそんなもの要求する方がおかしいとは思うけども。今度紫黒で作ってみるか。以外に一人ともはまつたりしてな。

しかし旅に出るって言つたって俺の飛ぶ早さは日本の北から南まで渡るのにもそんなにかかるないんだから。本当に直ぐに戻つてこられるのも確かなんだ。

おっと、獲物発見、今日は熊で我慢しどくか……この時代に熊つて贅沢なのかな？ 食べ終わつたら毛皮だけにして近所の村にでも送つてやるか。親切な妖怪よりつて感じでいいだろうか？ やっぱり『自由にお使い下さいとかでいいのかな？

俺は食事プラス贈り物を捕まえに急降下した。

翌日、熊の毛皮の服のオークションがあつたのはまた別の話。

「神奈子、幸せってなんだと思う?」

「なんだい、いきなりそんなこと」

「いや別に、特に理由はないかなあ?..」

寝る前に少しだけ話をする一人、別にどうこうとない話だが、今この状況ではなんとなく意味のある話になるのではないか? 特に恋の話に後からついてくるような話ではないか。

「幸せねえ、別に定義なんかないんじゃない?」

「そんなこといわれたら余計に分かんなくなっちゃうじゃん」

神奈子は笑いだし、諭訪子は妙にふてくされた感じになつた。

「別に、そんなこと考えてたら何やっても幸せにならなれないよ。そんなことよりも、もつと自分のことでも考えてみたらどうだい? 全員が百パーセント幸せになるなんて無理なんだから」

諭訪子はびつやら余計にわからなくなつてきたようだ、神だつてこういう時に悩まないことなんてない。むしろ神だからこそこの悩みもあるかもしれない。

「考えるより行動したら?」

「まだ先にならうだけどね」

まだ一方的な思いが、通じあうかどうかはまだわからない。  
それはもう少し先の話なんだから

## 神をも詠めたる詩のみの説み（後編）

え～と、なんか最初の方が読みやすい様な気がしていいの頃です。  
本当に一話が一番面白いんじゃないか……？

次の話は、かぐや姫の噂が守矢神社まで伝わってく的程度に有名になつたころまで話を飛ばしたいたいと思います。  
平安京に行こうついでに…的な感じで。

原作キャラもどんどん増やしていくみたいと思します。

## 吸血鬼と姫は互いに関係を結ぶ

時は平安、都からかぐや姫の噂が守屋神社にも伝わってきた。特徴からして輝夜に間違いないだろ？ そして俺は都までやつてきて、輝夜の屋敷を探している。

「多分一番賑やかなところだろ？ となるとあつちかな？」

噂によると五つの難題はもう出してしまったらしい、少し残念。  
えつ、守矢神社のほうはどうなったって？ そんなに知りたいか、  
じゃあ回想始めるぞ。

「とこづわけで、都に行こうと思います」

「あんたねえ……そんなに美人がいいのかい？」

確かに、これじゃあ誤解を招いてしまう。せめて俺がかぐや姫に会いたい理由を言わなければなるまい。

「実はさ、かぐや姫って俺のもといた世界でも結構有名な話なわけですよ、それも千三百年後にもきつちり伝わってるくらい。てなわ

けでそんな有名人を見たいと思うのはあたりまえじゃないですかね？」

……嘘はついてないもん、東方のことは何にも触れてないけど確かに有名だもん、日本で一番古いんだもん、俺そう習ったよ。まあその後二千年くらいたつたからどうなったのかは知らないけど。ともかく本当に有名なんだから。それに原作キャラだし会わないわけにはいかない！

「まあいいんじゃない？ そんなに有名なら氣になるなって言つ方が無理があるんだし」

「それもそうだね、私は許可するよ。ただここにちょくちょく戻つてくる」と

「わかった、じゃあ早速行つてくれるよ」

そう言つて俺は縁側の方へと歩いて行く、もともと荷物なんかないんだしそもそも衣食住だって現地調達で間に合つてるんだ。本当に必要なものがない。

「じゃあそいついで頼むから」

「ああいりうだけは迅速だねえ、もつ見えなくなっちゃった」

神社に残されたのは諏訪子と神奈子、あまりの行動の速さに呆れかけている。

そこで口を開いたのは神奈子、今まで何の進展もなかつた乙女の悩みに疑問を持つのは当然だ。対象がどこかに長い間いなくなるとい

うの元、黙つて見送ったのだから。

「いいのかい？ 行かせちまつて」

「いいんだよ、強引に止めてもいいことはないんだし」

どこか清々しくも物悲しい顔で言こわした、ただ胸の奥はどつなかでいるのか？

それは本人もわかっているのかすらわからない。

「時間はどのくらいあるんだい？」

「うへん、力としてはかなり弱くなつてゐるし。もう少しで醒めることになるかもしけない」

だつたらなおそれ……やつ言いかけた言葉を押しつぶさる。

「やばくなつたら連れてくるぞ」

「なら私も手遅れになる前に協力してやるよ」

協定が結ばれた。

しかしなあ、都の夜つてもう少し賑やかかと思つたら以外にパツとしない。俺だつてもといた時代のレベルを欲求なんてしないから、もう少し華やかでいてほしかった。

ともかく、はるか上空から吸血鬼の視力頼みで探していると、一際大きな屋敷を見つけた。そこに輝夜がいると信じて急降下する、一発で当たつたらラッキーだけど……

当たつたんだなそれが。屋敷の周りにかぐや姫かぐや姫うるさい連中がいるんだもん。こんな夜遅くなのに熱心なことだ、俺は抜け駆けするけど。

輝夜の顔を一目見るために庭の木にとまって待機する、しばらくすると輝夜と……あれは召使いか？ ともかく一人ほどついてくる。輝夜は一度こっちの方を見た、ばれたかと思ったけど違うらしい。輝夜は召使いに「しばらく一人にさせて頂戴」と言い、下がらせた。

しばらくするとおもむろに一匕ちらを向いて……

「こるのはわかってるのよ、妖怪さん」

……ばれてましたか。まあとにかく顔くらいは見せないと失礼だな。

「ばれてた？」

縁側に座る輝夜の間に前に跳躍する、まったく驚かれないのは何でだろう？

「あなたの名前は何と申すのかしら、翼のある妖怪さん？」

「猫を被るのをやめてくれたら教えてあげてもいいけど」

輝夜がこんなおしとやかに話すわけがない、これじゃあ一ート姫兼カリスマ兼おてんば娘じゃなくてただの淑女だ。

「あれ、最初っからばれてるんだつたら言つてよ。恥かしいじやない。けどまああんた良き氣がついたわね、私が普段淑女のふりしてるのでつてお爺様とお婆様と帝しか知らないつて言うのに。使用人も知つてる人がいるのかわからないのよ」

「それは光榮だ、数少ない秘密の共有者になれたというわけなんだからな」

「まつたく、いぐり私の立場があるからってこんなおしとやかな淑女を演じさせられる身にもなつてみなさいよ、絶対嫌氣がさすわようへん、それは共感できる氣がする。俺だつてそんな」としてたらそのうち嫌氣……いや、一田と持たずには嫌になるだろ？

「けどまあ氣に行つてはいるんだろう？　て……この環境が」

危ない危ない、危うく地上がと言つてしまつといふだった。そんなこと言つたら怪しまれるどころじやない。

「まあそつね……ってなんでいつの間にかあなたの自己紹介から私の愚痴に話が変わってるわけ？」

確かに、二つの間にそんな風に……俺が猫かぶるのやめられて言ったからか。

完全に俺のせいじゃないか、まあそんなこと気にしてる感じもないし、別に問題はないんだろう。

「とにかく名乗つておこつか、俺は紅羽霧、もちろん偽名だ」

「私は蓬莱山輝夜、もうあんたは輝夜でいいわ」

「じゃあ俺は霧でいい。お近づきのしるしだ」

おお、なんだかんだいってもう他人行儀じゃなくなってきてる、俺つてもしかしてコミュ力めっちゃある？ 隠れた才能、人とコミュニケーションを取ること……自分で言つて悲しくなつてくれるからやめよう。

しかし、原作キャラ三人目にも順調に会えたし、いつそのこと永琳が地上に来るまでここにいようかな？ そんで月の使者を追い払うのを手伝つて、後々永遠亭で再開なんていうテンプレ的な展開を迎えて……よし、計画はばっちりだ。

けど輝夜つて実際に会つてみると結構庶民寄りなお嬢様で、一緒にいても退屈はしなさそうだ。

「ところで霧は何で都に来たの？ 働きに？」

「俺は輝夜に会いにきた、といつか働きにきてなんだ？ 俺は妖怪だぞ」

なんで妖怪に向かつて都に働きに来たのかって聞いたらやうかな。

「知らないの？ 今の帝は妖怪にフレンドリーで、人間と共存する意思のある妖怪に都に住む許可を『えど』のよ

……俺啞然、何それ？ 聞いたことないよそんなの。ウェルカム妖怪なの、何やつてんの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ けど俺にとっては好都合だよ。それって人間から隠れて輝夜と会う必要がないってことだよね？」

「妖怪にしかできない仕事を引き受けたりしてるので、結構儲かるらしいわね」

「そりゃあ、妖怪様様なんだろ？」

確かに妖怪にしか

「なんなら私から帝に話つけてあげましょうか？ 霧といふと退屈しなさそうだし、私の所で雇つてあげてもいいのよ。ちょうど家庭教師が実家の母が重い病氣にかかりたつて言つて里帰りしてるから」

……話について行けません、けどまあ要するに輝夜は、私の所で雇つてあげるから、なんか面白い話でもして頂戴とか言つんですね？ わかります。

けどまあ俺にとつてもメリットだらけなんだ。それなら受けてもいいかな、どうせ月の迎えが来るまでなんだし、それまで輝夜と過ごすのもいいかもしねない。

「とにかく、それならお願ひしてもうつていいかな？」

「別にいいわよ、たしか丁度明日帝が来る日だし。お爺様とお婆様

にも話をつけなきゃならないわね

それは……なんか面倒そつだな。

「お爺様～お婆様～ちょっと来て～」

「そんな気軽に……もう少し気を使つとか

そんな風に紹介される身になつてみる。

ほら、なんて言つてる間に来ちゃつたじゃん。一人ともなんか拍子抜けしたような何となく諦めたような表情してるけど……よめた、普段からこいつことあるんだろ。

「今度からこの人……じゃない、そういうえば何の妖怪なの？」

「吸血鬼」

「今度からこの吸血鬼の人を家庭教師に雇つこととしたから」

率直だねえ、何となくいつもはどんな感じなのかわかる。我儘なんだかなんなんだか……

「あらそう、だったらこれからよろしく頼みますね。吸血鬼さん」

「何が言いたいのかはわかつています、普段からこんな感じでござります」

……おい。こんなに軽くていいのか？ まあとにかく、名乗つておかなきゃ失礼だ。

「紅羽霧と申します、今後ともよろしくお願ひします」

えーと、この後のやり取りはかなりカオスなことになつた、けども話はちゃんと通じてるんだよな。そこはさすがと言つべきか。

とにかく、いきなりの申し込みがなんとかなつてしまつたことに驚きを感じながら俺は正式にここに雇われる」となつた。

ここで働いている人全員に顔を通され、事情を察した人たちにはメールを送られた。

けどまあここでは「んなことさせ日常茶飯事らし」、どんな職場だよこ。

さすがに俺みたいにいきなり雇われるって言うことはないらしいけど、お眼鏡にかなえば自然とここに働き口を用意されたらしい。

「家庭教師とはいっても、俺ができるのはたかが知れてるわ

「吸血鬼なんだから長くは生きていんでしょう、色々話してくれるだけでいいのよ」

まあ、適当に俺がまだつけ狙われる前の話でもしておくか、それから「数百年の話とか。

「じゃあよろしく頼むよ」

「まあ待ちなさい、本当に」とが終わるのは帝に話をつけてからなんだから

確かにそうだ、なんでも本来なら真っ先に帝に話をつけなきゃならないらしい。

今回はかぐや姫権限でざつにかすむやつだけど……

「ともかく、私はあなたが気に入ったわ。せいぜい召へして頂戴ね

「言われなくともそつするよ、姫様」

おたがいに冗談のつもりで言つたのはわかるのだから。一人で笑つていた。

さてと、俺も昼間から起きる練習しなくていいなって……とは云いつても別に大丈夫だろ？

もともと半分は昼型だったのだから。普通に昼間に日が覚めるとかあつたもんな。

「やつこえばや、五つの難題とかどうなつたの？」

「あああれね、結構面白いことになつてゐるわよ。まあね

」

俺の新天地での生活、かなり幸先のいいスタートを切った。  
この調子で幻想郷ができるまで進んでくれたらいいんだけどなあ。  
こう思つてたらそうはいかなくなつちゃうのがあれなんだよなあ。  
一種のフラグつてやつ？ ともかく、これから輝夜の家庭教師か……  
ここにいる人たちは家庭教師と言う名の……とはわかつてるらしい。  
いし。前の人もそだつたらしい。

まあ気楽にいかせてもらおうかね。

## 支配者全てが傲慢な理由などない

「いい、もうすぐ帝が来るから。先に私が話しどおすからね」

「じゃあ俺はサイドに控えてれば問題ないんだな？」

「やうこい」と

しかし平安京に住み始めて一日で帝と対面するなんて、結構すごい体験だと思つんだ。

仮にも国で一番偉い人とただ長生きなだけの妖怪風情が会つちゃつたりしてなんか後先不安になるな。

「ほり、噂をすればよ」

そう輝夜が言つと、何やら玄関の方から話し声が聞こえる。ここの人間の人が俺のことを説明してくれるようだけど……なにやら笑い声が聞こえてくる。これはいいこととして受け取つていいか?

なんてことを考へてゐる間に、おそらく帝である人が入ってきた。黒と金が綺麗に合はさつた豪華な着物を着ていて、顔つきは案外普通だが女受けはかなりよさそうだ。  
輝夜と俺の顔を見た後、俺に向かつて話しかけてきた。

「主が新しくかぐや姫に仕えたという妖怪か」

ふむ、やつぱりこうじうところは普通の人なんだな。常識人っぽい

し、期待できそうだ。

「はい、紅羽霧と申します。ただ長生きなだけの吸血鬼であります  
が、一応家庭教師と言つ名のなんとやらと言つ形で奉仕させていた  
だいております」

……「」の時代の挨拶なんかしらないけど、これで会ってるのか不安  
だ。

変な風に勘違いされたらどうしようか。

「まあそいつ思まるな。どれ、詳しことは酒の席で互いに腹を割ろ  
うじゃないか。宴会の準備は出来てある。霧殿も庭に出て盆を交わ  
し合おうや」

うむ、この人もどつか抜けてる人だった。

先が思いやられるような……といふ帝がこんな適当な人で大丈夫  
なのか？ 平安京。

帝とかぐや姫と一緒に三人で宴会をするといふことのすゝみをわか  
つていただけるだろうか？ まず体験できない、といふよりかは最  
早奇跡のレベルであるといふことはわかるだろう。

けどまあ、まだ日が昇っているために俺だけ日陰にいるわけだが…  
…なんか気まずい。

「ほれ、主も飲まんか」

「では頂戴いたしまー」

「そんな固くならんでもよい、聞けば一千の時を生きる妖怪だといふ話ではないか。むしろ聖なるのはじりつけの言ひ事ではないのかの？」

えつと、一応四捨五入したら三千里になるくらいには生きてますナゾ……それでも帝にため口つてなかなか勇氣あるんじゃなー？ 輝夜は普通にやつてるナゾや。

「そんなこと云ひこなぐでいいの、別に呼び捨てでもいいんだから」「その前に名前まだ聞こてないよつた……」

そういえば来てから直ぐ酒で腹を割りつつとかつて言つてすぐこの宴会になつちやつたから。名前なんて聞こてる暇はなかつた。

「ナーハは素直に帝と呼べばよー」

「では帝、改めまして「普通に話すではないか、その方が氣楽でいいだろ？ では帝、乾杯しましょーうか」

俺達の宴会は夜まで続く……

とまあ、宴会が終わるころにはすっかり日が暮れて、俺の時間が来たわけだ。

帝ともすっかり打ち解けてしまった、今ではなんであんなに畏まっていたのかがわからない。普通に友人と話すような感じまで発展してしまった。

聞けば都で働く妖怪は皆そのような感じらしい。帝曰く妖怪が働いてくれているおかげで街が成り立っている部分もあるし、それに妖怪たちの方が長く生きていて、その分知恵も力もある尊ぶべき者たちという考え方らしい。

この時代から妖怪と人間の共存が始まっているのは俺的にありがたいことだ。

とはいってもそれは平安京だけらしいが。

そして俺たちは今、雑談タイムとなっている。

「なるほど、山が一つなくなるほどどの力とな。だつたら一つ頼みがあるのだがいいか?」

「何でしょう?」

帝直々の頼みなんだ、何か重要なことに変わりはないのだろうが……

「実はの、ここは人間と妖怪が共存できている。けれどもそれを良く思わない妖怪たちもいるだろう。そのせいか妖怪たちを受け入れる制度が出来てから人が襲われることが増えてきているのだ。そのため力のある者たちが自然と必要になってきての。どうだ、陰陽

師の真似事でも初めてはくれるかの」

……要するに妖怪退治を手伝えてことだら。まあ引き受けない理由はないな。

「わかりました、引き受けましょう」

「そりが、助かるな」

「けど私の暇つぶしにもちゃんとつきあってよね」

「今自分で暇つぶしつて言つたよね」

とにかく確實に楽しいことになつていて、なんだかんだいつこの世界はおもしろい。

帝が帰つた後は、一人で話すことになつた。

「けどまあ、妖怪が妖怪退治つて気分的にはどんな感じなわけ?」

「別に普通だよ、それに俺は元人間だし。噛まれて吸血鬼になつたタイプだから天然モノの妖怪ではないからね。一応心は人間のつもり」

「そうだったのね、まあそこら辺の事情については後でみっちり聞いてあげるから覚悟しててね」

なんとも好奇心旺盛なお姫様でいらっしゃいますな。

「それでも本当に俺の話せる」となんて全然ないぞ」

「こつちの世界で大体八百年、そして元の世界でひき」もつてなかつた年月は一百年くらいだ。実質人生の半分以上をひき」もつていた感じになつちまう。まあそれでもしばらくは時間も稼げるし、今は未来の遊びでも教えてやるか。

「そうだ、俺が昔住んでた世界の遊びでも教えてやるか?」

「昔住んでた? それってどうして?」

「ああ、セイコエビ」の話もしてなかつたつけ。

「とつあえず面倒だから後回しにしたい、とつあえずパートと遊びたい気分なんだけど」

「奇遇ね、私もなのよ」

「だつたら決まりだ、ちょっと道具を作るから待つていてくれ」

紫黒の使い道は無限にあるのやー

とつあえずチエスを教えておつます、けども一発でルールを飲み込んでしまうのはさすがとついぐせであろう、町の民は皆がこんな感

じなんだらうか？

とりあえず既に勝負は始まっている。初めてなのになかなか上手だから困る。

どちらも色が同じなので若干見ずらいが、そこは片方の駒にリボンをつけて見分けている。

それよりも見ずらいのはチョス盤本体だ。マス目がわかりずらいが、そこはお互いになんとかやっている。

改めて月の民の頭の良さを再確認するよ、地味にこっちが劣勢だ。  
まあここから逆転するのが俺のいつものパターンなんだけど。なんできちやうのかはわからない。

伊達に数百年やってねえよ、最近だつて諏訪子と神奈子と一緒にやつてたし。腕は鈍つていなはず。

まあ結果的に勝利したわけですけども、しかし輝夜が自滅してくれなかつたら俺が負けてたかもしれない。今度から俺の面倒との戦いにもなりそうだ。

そしてまあ自然と第一回戦へと向かうわけですね。

「チェックメイト」

「なかなかやるわね、けど次は負けないわよ」

「これは俺が負けるまで続くフラグだらうか？ そんで結局最後まで勝ち続けて諦めて……」

なんて甘くはない」と思つたが。<sup>△</sup>

そういうえば明日からの予定何にも決まってないんだよな。まあ行き当たりばったりでやつていこうか。

## 支配者全てが傲慢な理由などない（後書き）

警告「作者は竹取物語に詳しくあります  
どつか間違つてたら」「めんなさい」。

しかも今回短いというね、長い間空けておきながら。

間があいた理由としては、定山渓に旅行してました。温泉入ってきました。広かつた。

あと初めて、バトンに挑戦してみました。もしよかつたらもらひてください。

## 箱入り娘は籠の外をひつ見るのが

「ネタバレしてもいい?」

「いいわ、もう全くわかんない」

「注目するべきところは一つだけだよ、なんでKはRがどうやつて殺されたのか知ってるの? 公表されてもいないのでその時は関係者でもないKが知ってるはずないよね?」

「じゃあKが犯人で……わかつた、Tがグルなわけね!」

「そういうこと」

……何の話をしてるのかって? 僕は昨日の夜に、僕はとある推理物の話をしたんだよ。明日の正午までに謎が解けたら新しい遊びを教えてあげるって言つて。

けどまあ最終的には分かんなくつて僕が種明かししたってこと。  
けどまあこういう話だけは僕豊富に持つてるからなあ。あつがどう  
こう、俺がひきこもる前にいろんなネタを学ばせてもらつたぜ。

しかしまあ、いつかはネタ切れするだろつ。

けど輝夜と帝が親しくなつてから約二年が経つという、竹取物語と  
同じように話が進むならあと一年で月から使者が来るということだ。  
それまでの間に持つてている話を全部出しつくす覚悟で行けばいいだ  
ろつ。

けどまあ今回も俺が関与したところで歴史は変わらない。だから俺は存分に輝夜の手助けをしてしまって構わないわけだ。

不謹慎だがなんだか楽しみになつてくる。

俺が輝夜のところに住み始めてから大きく変わったことが一つある。俺たちは、最早家庭教師と生徒と言う関係ではなくなつてきて、互いに親友と言つか、それに近いものとしてお互いを見つめになつてきた。

おそらくは俺の出生や今までの人生の話をしたあたりからだらう。けども、輝夜は同情などではなく、俺の生き様を知つて俺に近づいた。といつよくな感じで話しかけてくれる。

正直それが一番ありがたい。下手に同情される辛さは、経験者かれを理解する人にしかわからないんだ。だから特別に何々してあげましようは一番嫌なんだよ。

特別扱いされる側の気持ちがわかつている輝夜は、その点をわきまえていた。おそらくは同じような思いをしてきたのだらう。

結論。こんなようなことを朝から正午までできる俺らの暇人度はほとんどないとと思つ。

そして若干太陽が下ってきた。こせなり思にもよらなことを見た。

輝夜が言つてきた。

「ねえ霧、私町の中を歩き回りたいんだけど

「いきなり何を言つている」

それは無理な話だう、かぐや姫だつてばれたら大変なことになる。  
大騒ぎどころではないだう。

それには毎間だ、俺だつて輝夜を連れて逃げ切れるかわからない。  
「だつて私、なんだかんだいつて一度も街を自由に歩き回つたこと  
なんてないのよ。霧の話聞いてたら外への好奇心がどんどんくすぐ  
られるじゃないの。それに霧がついてるでしょ？」

「それでも無理なことは無理、それに自分が真毎間からあるいた  
ら騒ぎが起つることくらいわかってるだう。俺だつて毎間から輝  
夜を抱えて逃げ切れる自信はないぞ」

まあこのへりへいで諦めてくれる性格はしていなうだう。俺だつて  
そのくらいわかつてこる。

まあ誰だつてひと用ひで暮らせばわかる。それで思つてもよらない  
発言をしてきた。

「だつたら夜に出歩けばいいじゃない

……余計に危ないつてことわかつてますか？

結局、お爺さんお婆さん召使い俺その他で説得したが頑固拒否され。俺が警備役になってしまった。

あまり人がいると目立つから腕が立つ俺を一人だけつけるといつことだ。夜だったら俺と輝夜を連れて逃げられるしな。

「決定ね！」

そして輝夜は夜まで寝ると言つて寝室に行つてしまつた。

結局一番面倒な役を押し付けられたわけか……

そして夜、輝夜も結構庶民的な服装をしてカモフラージュ。  
俺はいつもと変わらない格好で輝夜の周りにつく、その際は俺の方が目立つてしまう気がするがあいにく俺は和服を着て性能が十分出せるほど着慣れていない。  
別に奇抜な服装の妖怪も多数いるとのことなので大丈夫だろう。

もしもの時のために、かぐや姫であることの証明書を書いてもらつた。

たしかに人間と妖怪が一緒にいるところを見たら、俺のことを知らない陰陽師どもは怪しむであらう。賢明な判断だ。

まあ大抵の陰陽師に知られているくらいには仕事はしているが。な

んでも都を襲つてきた妖怪一味を退治したところ、その中に名の知れた大妖怪が入つていたらしくてそのおかげで俺の評判は鰻登り、一般人でも知つている人は名前ぐらいはわかる程度にまで來た。

「ほら何してるの？」早く行くわよー。」

「はーはー、あんまりせしゃれかわぬなよ」

無事に帰つてこれるといいなあ。

大きな通りを輝夜と歩く、後ろ姿は見た目相応の子供のようで少し可愛らしい。これは別に俺が口リコンと言つわけではなく、ただ単に無邪気さがと言つ意味だ。勘違いするなよ。

「ねえ、あれは何？」

飲み屋はまだ早い……けど宴会とかでは普通に酒飲んでるしなあ。  
さすがに飲み屋に特攻させるのはまずいだろうし……

「飲み屋だな、金出して皆で酒飲んで騒ぐところだ。まあ宴会場とかと同じ考え方でいいだろ?」

はゞやれひと一皿つか。

「（レ）よりも他のところでも見て回つたうだ？　屋敷の中じやできなじみの事の方がいいだろ」

「やうね、そつするわ。じああ他のところに行きましょ」

若干声が大きいが……まあいいだろ。さてと、次にお眼鏡にかかるのはどこかな……

輝夜が足を止めたのは、小さな団子屋の前だった。

「ねえ、いじはどんなどこへ？」

「団子屋だ、まあ名前通りのものだけだ……」

といふかそれ以外に説明しようがないだろ。

「ちょっと寄つて行つていい？」

「別にいいけどさ」

勘定は輝夜持ちなんだし自分で決めたらいい、小づかい預かってきてるみたいだし。

まあいざとなれば俺が出してやらないこともないけど……一応陰陽師の真似事して稼いでるわけだし。

輝夜だつて注文の仕方くらいはわかる、俺も何か食べようかな。俺も最近は屋敷の方で出される料理も食べてたから、和食も食べられるようになつていてる。

主食血液でやつてきたためになかなかなれなかつたけどな。

「せりお嬢ちゃん、あんみつ団子」

「あつがとい」

うん、幸い気がついてはいないようだ。まあかぐや姫って言つたつて一般の人たちは毎日見られるような存在ではない。顔を見ただけじゃわからない可能性も十分あり得る。

まあそこは私が有名すぎる」とが舌と出たか。

さて、まあとにかく輝夜にもしばりへな子供の時間でいてもひつとするかな。

## 静かな水面を波立てる一石は

「いつこう高い身分で、なかなか外に出られない人ってのは、やっぱり外に憧れをもつものらしい。」

そして外に出るとなんとも嬉しそうな顔をするという。お供していふじからが幸せになれるそうな笑顔だ。輝夜もなかなか外に出られないことによほど不満を持つていたと見る。

こうして一通り見て回ったが、少なからず物足りなさそうな感じがするな。まあ幻想郷ができるまでの辛抱だから、そこまで遠く……いや、十分遠いな。あと何年も何年も待たなくちゃならない。

とまあそんなことを輝夜の背中を見ながら黙つ俺であった。

これから屋敷に帰るところである、特に問題も起きず、かぐや姫だとばれることもなく、お忍び旅行としては大成功と言つ結果「鬼だ！」鬼が来たぞ——」といつわけにはいかなかつたらしい。

鬼が来た？ わざわざこんな時間に攻めてきたつてこと？ そんな夜襲なんてしないで白亜堂々襲つてきそうだけどなあ、鬼は。夜襲なんて卑怯マネなんかしない！ とかいつて。

ともかく、俺も陰陽師の真似事をしているんだし。行かないわけにはいかない。

ともかく、いそいで輝夜を送つてしまおう。

「ねえ霧、鬼が来たつて言つてゐるけどどうあるの？」

「輝夜を屋敷まで急いで送つて直ぐこいくよ」

そういうと俺は輝夜を抱きかかえて……。

「えっ、ちよつとなんなのよー。」

そのまま飛んだ。

はじめのうちは輝夜も嫌がっていたけどだん景色を楽しむようになつてきた。

ておかないとな。まあ俺のできる限りのこと教えてやるが……俺は翼で飛んでるしなあ。

「空からの眺めはどうだ？」

「最高ね、私も自分で飛んでみたい」

「そりが、けどももう屋敷についたぞ。」  
「お別れだ」

「そう、残念ね」

俺は地面に降り、ちょうど玄関にいた召使いに輝夜を預ける。召使いの人は面喰つてるが輝夜が説明するだろう。

さて、俺はどうに行けばいいのかな？

やつ思ひやねや、俺は帝の屋敷へと飛び立つた。

帝のところの陰陽師知り合いに話を聞いたところ、都の南門から堂々と突入してきて、こちらへ向かってきているらしい。なかなか力が強く、いまから俺を呼びに来る予定だったそうだ。これは好都合だな。

ともかく俺は、南門の方へと向かうことにある。

そして、その鬼を見つけた時にはもう既に門と帝の屋敷のちょうど真ん中あたりであった。

なるほど、なかなかに力の強い鬼だな、これなら陰陽師たちが苦戦しているのもわかる気がする。ゾット千年は生きているだろう。それくらいの妖力が伝わってくる。

さて、こんかいは家屋の被害まで氣を使つてゐる余裕はあるかな？

ともかくやるしかない、俺はその鬼に向かつて急降下し始めた。

「まだ増援はきてくれぬのか！」

「早くしてくれ！ 救護班はこっちもたのむ！」

現状はひどい有様だつた。破魔矢やお札などが全く効果がなく、一方的にこちらが数を減らされている、これではほとんどの陰陽師はいるだけ無駄であろう、むしろ遠くに行つていもらつて、他の仕事をしていてもらつた方が助かる。

ともかく、俺が行かなければ話にならないだろう。少なくとも俺だって年齢の分の力はあるつもりだ。それ相応の戦いはできる。それに今は夜だ、夜の吸血鬼を舐めてもらつては困る。

「おい、大丈夫か？」

吹っ飛ばされてきた陰陽師の一人に声をかける、俺はこいつを知らないがこいつは俺を知っているらしい。俺も有名人になったもんだ。

「霧さんじゃないですか、お願いです、あの鬼を止めて下さい」

「わかつてゐる、そのためにここに来たんだから。他の陰陽師にも伝えてくれ、他の陰陽師たちは撤退、その後住民たちの避難の手助けに専念、帝やかぐや姫も安全な所へ。攻撃から守り切るくらいなら十分にできるはずだ」

伝えるべきことは伝えた。これで俺の心配事はなくなる。

「撤収

他の陰陽師たちが、俺の姿を確認した後に納得したような表情にな

つて四方八方に逃げ去つていぐ。そんなに俺が戦う時にそばにいるのが怖いか？　たしかに半径三十メートルは危険区域になるけどさ。

ともかく、鬼の方も俺に目をつけたらしい。ここからは真剣勝負だ。

「なんだ貴様は、妖怪じときが俺に勝てるとしても思つてゐるのか？」

「思つてゐるが、だつて俺はただの妖怪じゃないんだから」

? 紫黒  
?

俺は紫黒を大剣にする、おそらく鬼の力と打ち合ひにはこれくらいは必要だろう。いくら紫黒が頑丈でもレイピアで鬼の拳は受け止められない。念には念をだ。

「夜の帝王の力を見せてやる」

「おもしろいじゃねえか、かかつてこいよ。さつさとぶつ飛ばしてあんたらの帝とここまでいかせてもらつぜ」

やはり狙いは帝、今立てた俺の仮説は人間と妖怪の共存に異議を唱える者。おそらく単騎出陣してきたのだろう。

鬼が何か策を立てるほど小作なマネをするほど落ちぶれていないと驅けるしかない。まあ協力者に他の妖怪がいたら話は違うがな。

ともかく、俺のすることとは目の前の鬼を倒すことだけ。

「おつと、そういうえば名前を聞いてなかつたな、俺は金津 力道。これから帝をぶつ殺して都の人間を襲わないなんてほざいてる鬼た

ちを変える野や」

「なるほど、俺は紅羽霧。お前をぶつ倒して都の平穏を取り戻す男だ！」

無駄にかつこよく決めてみたけど、これで負けたりしたら恥ずかしいよな……

まあ氣を引き締めてこいつ。

「じつちからこくせ」

拳と大剣がぶつかりあつた。

力はお互に拮抗している、さすが鬼だ。年齢差をものともしない荒々しさがある。

俺だつて小細工に関しては負けるはずがないが、というか力以外は負けたくない。俺のプライド的に。まあだったら力でも勝てって話だが……

一回二回と打ち合っているうちに、だんだんこっちが優勢になつてきた。けれどもさすがは鬼、なかなか決め手が入るほどにならない。これは長くなりそうだ。

そしていつたん間合いをとつた、間の距離は10mほど。そしてお互に感じ取つた。？相手は本氣で終わらにかかる気だと

?

静かな水面を波立てる一石は（後書き）

新年あけましておめでとうございます。

いやー今回の年越しへメイプルストーリーでした。

楓鯖はきの「神社」であけおめいふるです。

新年一番の作品は一千字くらいでみじかいんですけど……まあ許してください。

また今年一年よろしくお願ひします。

## 力と力はそれぞれ違つけれども同じもの

奴の決め手がわからない。それが一番怖いところである。もちろん向こう側も俺の決め手を知るはずもないけど、お互いに手の内を知らない戦は何が起こるかわからない。それだけの不安定さがあるものだ。

俺の霧の攻撃はもしかすると知られているかもしれないが、陰陽師の真似事を初めてからは炎は使っていない。おそらくは裏をかくことができるだろう。

この作戦さえもが相手の考えの中にあるといつになら話は別だが。

とにかく俺は手に力を入れる、一触即発の空間は今すぐにでも張裂しきてしまいそうだ。

そのくらいのプレッシャーに満ち溢れている。

すると、遠くから声が聞こえてきた。

「霧殿！ 一般市民全員の避難が完了しました」

……誰だか知らないが助かる、その言葉を待っていたんだ。  
物が壊れるのは仕方がないとしても、人が死ぬのは目覚めが悪い。  
おそらく俺に全力で戦えるようにと言つ帝か同僚たちからの配慮だ  
らう。さすがだ、俺の性格をわかっているじゃないか。

とにかく、俺はこうして全力を出すことができるわけだ。

「これで心配事はなくなった、存分に力を出し合おうじゃないか

俺は一步踏み込むと、それがお互い動きだす合図となつた。

「燃えぬ……！」

俺の紫黒な炎があたり一面を燃やしつくす。戦場は確実に姿を変え  
る。

そして炎は全てを飲み込む。

「フンッ！ 俺はこのへりこでくばる狂ビヤツじやないんでなあ  
！」

炎の中を突っ切つてこちらに一直線に走つてくる力道、そして俺に向かつて振りおろしてきた拳を後ろに避ける。

するどいだらう。そのまま振り切られて地面に突き刺さった拳は、大きなクレーターを作り出した。直径一メートルはあるのではないだろうか？ ともかくあの力があいつの決め手とやらなんだらう。確かに当たればただでは済まないはずだ。

俺は槍を作り出し、ひと突きにしようとしたが。紫黒を軽々と受け止めた力道は槍をつかむ俺」と遠くへ投げ飛ばそうとした。

俺は慌てて槍を消し、飛んで距離を取る。空を飛んでもいいが、その場合純粹な弾幕戦になつてしまつたために被害がとんでもないことになつてしまつ。

「なかなかやるじゃん、そんだけ力があるんならかなり鬼の中でも上の方だろ」

「フン、どうだかな。あんな臆病者たちの頂点に立とうがなんとも嬉しくないさ」

短い言葉が交わされる、それは気休めでも何でもない。お互いに探りを入れるというわけでもない、単純に言葉の掛け合いだつた。この勝負を楽しんでいるお互いの言葉の掛け合いであった。

「燃やし尽くせ！ 全部飲み込め！」

俺は炎を力道に向けて集める、摂氏何千度の炎なんだうか？ 自分ではわからないがそつとう暑いらしい。これを食らった妖怪どもが証言してくれた。

まあ、これでも倒せるなんて甘い考えは持っていない。現に持つだけ無駄だった。

炎を払い飛ばしながら現れたそいつは、やけどを負いながらも平然としていた。

「うつやあ炎はきかないな」

俺は炎をしまい、霧を使うことにした。破壊力だけなら炎の比ではない。むしろこれで壊せないものは見たことがないくらいだ。

俺の力の集大成……とは違う。むしろ全ての基本であり、頂点に立つ力。

それが俺の霧の力だつた。吸血鬼になつて手に入れた力だつた。

力道の拳を右へ左へアクロバットのように避けて行く、吸血鬼の身体能力だからこそ出る技ではあるが、自分の種族の特権を使わないのは損と言うものであろう。

そして俺は身体に霧をまとう。俺の破壊の力を存分に振るうために。

「行くぜ鬼！」

「来いよ吸血鬼！」

俺の一発目は霧の津波だ！

地面を這いつよいに、それは流れるという表現が一番ふさわしい破壊の霧、まさにそれは津波のように、広い大通りを流れで行く、地面を削り、家までも巻き込む。

それでも鬼は立っていた、全身に傷を作りながらも立っていた。腕を胸の前で交差し、懸命に踏ん張つている。

鬼は破壊の津波を耐えきつた、霧によつて蝕まれながらも耐えきつた。全身にできた傷、それは勲章だった。

「これで終わりなわけがないよなあ

「もちろんだ、これからもっと楽しくなるぜ」

吸血鬼は悟った、こいつは強い、神奈子を除けば一番強いだらう。人間の作り出した兵器よりも、都を襲おうとした大妖怪たちよりも強い。

そして、自分は今極限の世界にいると。

力道は崩れ去つた家のところに、とても優雅に、鬼から感じられる荒々しさなどは何も感じない。けれども力強い跳躍で飛びふと。一番大きな材木をつかんだ。

「これからは次元が違うぜ」

「わかつてゐ、俺たちの戦いをそこまで軽視するほど愚かではないぞ」

「そうか、それなら安心だ」

力道は材木を大きく横になぎ、横一線に殴りつけた。  
そこで起きた風は、周りのものをさらにおぼ壊させた。

霧はそれを空へと回避し、霧を使って足元を狙う。狙いは田くらまし、一瞬でも姿を完全に隠せれば勝機は見えてくるけれども……そ  
うはいかない。

材木は霧に向かつて投げられた、霧は投げられた材木を使って空中で跳躍するとまだ大勢を立て直していない力道の背後を取り、霧よ  
る攻撃を繰り出した。

力道は振り返るや否やそれを腕を振り払うことで打ち消し、逆に特

攻を仕掛ける。そしてそれは霧のもとへ一歩届かず空へと空振りに終わる。

霧は後ろの空に向かつて翼を広げて飛び立つた。そして全身全靈をかけた霧の砲撃を打ち出した。それを迎え撃つ力道は自らが跳躍し、拳を掲げて真っ向からぶつかり合う。やはり強いものには正面からぶつかり合う鬼の執念は残つていいのであるつか？

そしてお互いがぶつかりあつた、それはすさまじい爆発と衝撃を生み出した。そして勝者は霧、力道は力負けして飛ばされる。そこに追い打ち攻撃が掛けられる。

「投げ槍！」

紫黒を投げ槍に変えて投擲する、黒く紫色の槍はまるで流星のようだつた。

それは鬼の体にぶつかるとはじけ飛んだ。後に残されたのは胸板が真つ赤に染まつた鬼だった。けれども鬼は地面にしつかりと立っていた。

「なかなか……やるじゃねえか」

力強く大地を踏みしめる、その顔にはむき出しの闘志が残されていた。

お互に走り出す。鬼は右フックを繰り出す、吸血鬼はそのわきの下をぐぐり、体をひねつて鬼の脇腹に自らの拳を叩きこむ。どうして自らの得手である武器を使わなかつたのか、それは誰もわからない。

勝負がついたのは一瞬だった、吸血鬼の腕力によつて繰り出された拳は鬼の骨を砕き、内臓を潰した。

鮮血が迸る、顔は既に返り血を浴びて赤い模様が出来ていた。鬼は口から血を噴き出した、おそらく内臓が破裂したために血が逆流してきたのだろう。

そして吸血鬼は、自分の左拳の骨が粉々に砕けているのを感じた、これが奴の、鬼としての、力道の最後まであきらめない強さである。それは吸血鬼の治癒力の前に最早修復が始まり、明日明後日には元通りになってしまつようなものだつたとしてもだ。

それが鬼と吸血鬼がこの場所で戦つた証なのだから。

崩れ落ちた鬼を吸血鬼はそつとさせた、霧は最期に一言声をかけた。

「こんなに強いとは思わなかつたよ」

返事はすでになかつた。

「せんと、とりあえず仕事は完了したと伝えなきゃいけないな。どこに避難してるんだらうか?」

おそらく騒音がやんだことで戦闘終了は理解したはずだ、陰陽師の誰かが来てくれるだろ？。どちらが勝ったのか見極めなければならないのだから。

さて、それまで休ませてもらおつか。実はくたくなんだよ。本当に疲れて死にそうと言ひ比喩が当てはまるくらいにね。

力と力はそれぞれ違つけれども同じもの（後書き）

総合評価100点越えました、ありがとうございます！  
目指せ1000点でやつてますからね、これからもよろしくお願い  
いたします。

戦闘シーン、実はこの戦いは主人公戦つてまともに決着付けたこと  
ないじゃん。

という俺のふとした思いつきから始まりました。  
グロシーンとかどこまでいいのか分からぬので最初は控えめに、  
できれば感想の方でどんなところまでOKなのか教えていただける  
と助かります。

まあこれからもバトルはありますしね、自分としてはわくわくする  
展開を考えたいと思います。

## 形の違う鬼の下で取り決めは神聖な

あれだけ大きな戦いも、終わりはあつけなかつた。

偵察の陰陽師が俺を発見し、そのあとはすぐに復興が始まつた。派手に壊したからかなり大変らしいがあんな奴を被害なしで倒せるなんて馬鹿らしい見込みは皆していなかつたらしい。まあ要するに正当な代償だという風に片づけられた。

力道の埋葬は鬼たちに任せたらしい。今日改めて代表が今後について話し合いに来るそうだ。おそらくは……鬼神とやらが来ることになるのだろうか？

俺は一応鬼を殺した張本人なために立ち会うことになるが……さすがに今回は正当防衛だろう。俺が止めなかつたら確実に死人が出でいたはずだ。

それに今の俺には戦う力が残つてゐるかどうか怪しい。左手の骨は一応治つたものの手首から先はだらりとぶら下がつたままだ。体中の血が不足しているし万全ではない。

まあ俺の霧や炎は血を代償にしているわけだから、軽く一リットル消費したということだ。

久しぶりに人の血攝取しました、快く承諾して下さつた帝の側近の人には本当に感謝している。もちろん皿に移してからだぞ。直接飲むのはさすがに嫌だらうじ。

「んで、もうすぐ鬼の代表者がくるんだな？」

「もう来てもおかしくはないなあ、まあ争いごとならない」とを  
祈つておくかの」

俺だつて御免だ。この状態で戦えつて言われたら迷わず逃亡するぜ。  
戦う前から満身創痍なんだから。

最初からHPゼロで戦うほど愚かではない。決して。

と、そこへ走つてきたのは門番だつた。たしか……いつも門の右側  
に立つてる方。

「鬼の方をお見えになられました」

「よろしい、通せ」

「いつこいつときは威厳がある帝、やつぱり貫禄は伊達じや ない。ま  
あこいつでもなきや ここまで大きな街を一つにまとめるのは不可能だ  
とは思うんだが。

とにかく帝も鬼神とは顔見知りらしに、そつ固くなぬ」とはない  
らしい。

そしてやつてきたのは、予想通り鬼神であつた。

そして部屋に入つてくると深々と頭を下げた。短くて、おしゃくは三センチ程度しかないあるつほほ三三角形で表せるほどの小さく可愛らしい角が印象的である。

「本日は人間と鬼との間の……」

「ずいぶんと礼儀正しいじゃないか。

鬼ってみんな豪快でこうこう時も豪快に第一声を大声で放つて来る奴らばかりだと思ったが。どうやら違ひらしい。

「そんなに改めなくともよからへ、いつも通りの主でないとかえつてやりすら」

「そう、だつたらいつも通り行かせてもらひよ。早速本題に入るけどあなたの横の奴が例の力道を殺つた奴だね？」

「だよな？

まあやつぱり鬼つて言つのはいつでも堂々としてるもんなのか。

ともかく質問に答えないといけまい。

「俺が力道を殺した、この場合は正当防衛を主張させてもらひが

すると鬼神は突然改めてお辞儀をした。

「力道については、あまり大きな声で言えないが正直感謝してるんだ。あいつは過激派な鬼でなあ、人間と慣れ合つ鬼を実際に殺して

いる。実を言うと奴はもう鬼のテリトリーから永久追放されているから精密に言えば我々鬼はこの件には関係がない。ただ人間と鬼の間のいやいやだ

そして一息つくとまた話し始めた。

「だがまあ私たちとしてもこちらの損害を恐れて処罰を下さなかつたのも事実、それに關してはこうして頭を下げよう」

……正直なんとなくは可能性の中に入っていてもおかしくはない事実である。

単身鬼が都に乗り込んでくる。それについて考えられるのは、仲間がいないことが考えられるからな。

仲間がいればそいつらも引き連れてやってくるだろう。なかなか確信の持てない推測だったが、これですべてが明らかになった。

「まあ都の被害の方は小さくもないが誰も死んではおらん。どうだ、霧には少し悪いかもしけんがあ互いこの件は忘れてしまおうではないか」

「なんだ、俺は別にそんなこと気にしないぞ。それよりも鬼との関係が崩れる方が大問題だ」

「そういってくれるとありがたい、と帝は言葉を返した。そして鬼神も。

「そういうてくれると助かる。さてここからは別件なんだが、力道を倒す強者のじつりよくをみていたいという連中がうるさくてな、

どうだ一つ鬼の代表と戦つてはくれぬかのう~」

……なにこのフラグ？

「なるほど、確かに戦いが好きな鬼の言いそうなことだ。どうだ霧、一つ受けてやつたらどうだ？ まあこんなこと頼むのも悪いがこれも一種の接待というもの、ひとつ人間代表でやつてみてはくれぬだろうか？」

うん、これは死亡フラグと言つのかな？

けどなあ……ここで受けなきや人間は臆病ものだのなんだのいろいろ言われることになるし……

「わかりました、受けましょう。ただしそちらも万全な状態の俺と戦いたいでしょ、し勝負は一週間後。俺の傷が癒えてから。でいいですね？」

「よからう、こちらの代表は伊吹萃香。鬼の四天王の一人でなかなかの曲者だぞ」

なるほど、相手は萃香なわけか。原作キャラとのご対面なわけか。しかし厄介な相手になるんだろうなあ、主に能力とか能力とか「密と疎を操る程度の能力」とか能力みたいなのが。

「そうだ、主名はなんと申す？」

「紅羽霧です」

すると鬼神は高らかと宣言し始めた。

「では勝負は一週間後の正午、場所は後からこちらが指定する。紅羽霧と伊吹萃香との決闘は私の名において、奏姫桜花の名の下に置いて絶対不可侵にて神聖なる下でお粉会われると誓おつ」

「じゃあこちらも人間代表がそちら鬼のお眼鏡にかなつものだと約束させてもらおうかの」

こうして取り決めが決められた。

「すまないな、何度も何度も」

「いや、こうして都に居場所を作つてもらえてるだけでありがたいんですから、むしろ礼を言う立場なのはこちらだらう」

それに原作キャラに会つてい機会だし、たぶん勇儀も来るんだろうし。

けども鬼神の名前格好良かつたな、桜花だつて桜花。俺の霧なんてちやつちやい名字何かとは全然違つ。

「さてと、そろそろ輝夜の屋敷に顔見せないと怒られそうだ。じゃあ何かあつたら教えて」

「つむ、おそらくは決闘の場所が決まればなにかしらの手段で伝えよつ。それではな」

こうして俺は輝夜の屋敷へと向かう。おそれらへ何か言われるだろうけども。まあ覚悟しておへか。

## 想い神は思いの矛盾の中で何に辿り着くのか

鬼との勝負はあと四日に迫っていた。

そして鬼からは場所の決定を知らせる使者がきた。

俺は鬼のことを全面的に信頼している、鬼が正々堂々と俺と対等に勝負ができるステージを選択してくるというのは予想出来ていた。そして指定されたのは洞窟だった。

鬼が集会のときに使用している洞窟をそのまま使用するらしい、広さは「この屋敷が二つほどすっぽり入るとか。それならば申し分ない。

天井は大体四十メートルほどでドーム状、なんで天然モノらしい洞窟がそんな都合のいい形なのかは聞かないでおくが俺にとっては非常に有利になることは間違いないだろう。

場所は帝が知っていること、すでに一回足を踏み入れているそうだ。

ちなみにそのうち広くするつもりだったのである程度の破壊はOKとのこと、それはどっちにどうでもありがたいルールだろ？

鬼だけでなく人間も見に来るらしい、おそらく正午に行う理由の一番はこれであろう。夜活発になつた妖怪どもの襲撃から人間を守りぬくよりも、昼間にうちに済ましてしまおうという魂胆だ。

まあそれについては俺も納得だ、昼間なら普通の妖怪だつてそう大胆な行動は起こすまい、すなわち俺はこの条件に文句はない。

「じゃあ俺からは承諾という形でお願いできるのか？」

「もちろん、では四日後には」でまた会おう」

そういうと鬼は（そういえば名前聞いてない）大通りへと走つて行つてしまつた。玄関で立ち話したらすぐ帰るなんて、案外せつかちな奴だな。あがつてお茶でも飲んできればいいのに。

俺の現状はだ、もう以前と変わらない動きはできるようになつてしまつてゐる。けどもさすがに手首から先が全て粉碎したために治つた今でも違和感は多少ある。

しかしそうな吸血鬼の回復力、これから何度もお世話になるのだろうか。

おそらく四日後にお世話になるだらうが。  
といふか俺つて普通の人間の生命力なら何十回も死んでるんだよな、  
こういう点ではもうすっかり吸血鬼に染まつてるわけか。まあいつまでも人間と同じよう、「う」と言つわけにはいかないけど……少し寂しいといふかなんどこつか。

「霧~どこのの?」

「玄関、今行くから待つて」

うちの姫様はこんな時でもマイペースだけだ。

「そりいえば今度戦う鬼って有名な鬼なんでしょう？」

「鬼の四天王の伊吹萃香だ、厄介な能力もちだけど破壊力だったら俺だつて負けないよ」

そう、その気になれば都だつて更地にできるんだから。

鬼だつてさすがにそこまですると大変だらう、その点では俺の方が有利だけどな……いや、鬼と対戦するにあたつて破壊力の優勢は大きなアドバンテージだ、これは戦略の幅が広がるかもしれない。まあもしかすると萃香の本気がとんでもないっていう可能性も入れておこつか。

結論、どっちの場合も考えとく。

「輝夜だつて一応戦う力はあるだろ、たぶん都の人間全てのイメージひっくり返すと思うけど」

「そりやあ私だつて普通の人間じゃないしね、けどまあそれは暇つぶしのネタがなくなつたら考えましょうか。ほら、今日はどんな話をしてくれるの？」

守屋神社は今日も平和である、けれども住人の一人は大きな悩みを抱えているのであるが……

「（「これじゃあ長く持つてあと一年ちょい、神奈子には『氣づかれない』とは思うけど、どうかねえ）」

諏訪子は自分の信仰が少なくなり、生活に必要最低限な労力を賄うことも厳しくなってきていると悟っていた。そしてあと一年もすれば自分は眠りに就くことになるだらうと。

「今帰つたよ諏訪子」

「ああ神奈子。今日の成果も上々みたいだね」

最近布教活動が活発になつてきている、なんとかして守屋神社の参拝客を増やすことに必死なわけだ。

けどそれは私の信仰の回復に直接つながつたりはしない、信仰されているのはあくまで神奈子なんだから。

「なあ諏訪子、単刀直入に聞くけどもつて後どんぐらー？」

「（一、なんで？ 神奈子が気がついてるつて言つのかい？）そんないことないよ、まだ眠りに就くなんて早すぎるよ」

「誰もあんたがどのくらい起きていたるかなんて聞いてないよ。やっぱりそうなんだね？」

……やられた。

「第一気がつかないわけないだろ、一緒に暮らしてるわけなんだから感じ取れる神力減ってるのくらいすぐにわかる。で、それを踏まえて聞くけどあとじんくらいなんだい？」

「あ、そこまでばれてるのなら仕方がないかな、もつ本当のことと言つしかないだろうね。」

「もつてあと一年、それ以上は保障できないよ」

神奈子がとつても複雑な顔してて、たぶん考えてることせーつだけだろうけど。

「そんなのが自分でわかつて霧を見送ったのかい？」

「やうやく、霧には私つて言つおもうを背負つてほしくはないからね私のせい霧が重荷を背負つて言つのは嫌だ、だから止めなかつた。これからだつてそうだ、すべてが終わつてから事実を知ればいい。そうすれば苦しむのは私だけで済む。」

「あんたの気持ちは何となくわかるよ。けども、私はビリよつもなくなれば勝手に進めるからね」

「……まあ。ビリじたらいいんだろ。わかんないよ。」

「（どうしようもなくなつたら呼び戻すしかないのかな）」

神奈子は一人考える、どちらも救うことができる方法を。そして思いつく、一つだけあつた望みを。

「（霧の能力で生み出せる？力？の中に、もし神力が入つてみるとしたら？）」

それならば諏訪子の力を一時的に全盛期のころまで戻せる、そうしてその間に？守屋神社には神が一人いる？といふ噂を広げて、どちらとも進行すれば何かしらの恩恵があると思わせられれば、そうすれば信仰は諏訪子にも……

そんなうまく行くなんてことは思つていない。けれども少しでも効果があれば変わるかも知れない。

そうすれば……また元通りになれるかもしない。

元通り？ いいやちがう、ただどちらも妥協できる。

妥協？ それでいいのかはわからない。ただお互いの思いが。

お互いの思い？ 通じあえないとわかっているのに、霧が諏訪子を心から愛しているかは本人しかわからない。

自分はいったいどうしたらいいのだろう？ 時が全てを解決してくれるのだろうか？

「どうすれば解決になるんだろうねえ？」

自分に向けられる恋心、というのに気がつかない人は意外と多い。片思いというのは意外と多いものなのだ。思いに気付かず、ただ時が流れ行くというのは意外と多いのだ。思いを向けられた彼は意外に気がつかないのだ。そして月日は過ぎ去っていくのだ。

そして迎えた鬼との決闘の日、俺は案内役の鬼に連れられて山道を歩く。

輝夜や帝も立会人によるらしいし格好悪いところは見せられない。日傘を握る手に少しだけ力が入る。

この日のために完全なる昼夜逆転生活、とはいっても人間にとつて

は普通なんだけど。

とにかく、この田のために夜に暴れないで我慢してきたんだ。その分のつけは払わせてもらひや。

「ほら、ソニアが集会所だ」

その言葉で意識が目の前に戻る、そして細い洞窟の道をくぐった先には本当に広い、ただ火がともされて全体がどこか温かみのある光で包まれているとても大きな空間に出た。

中央にはまるでラスボスだとでも言わんばかりに萃香が立っていた。いや、ゲームではラスボスか。

ともかく威厳たっぷりに仁王立ちしていた。  
なんか萃香ってノンカリスマなイメージあつたんだけど全然違う。  
ただ幼女が仁王立ちしているだけなのになんだかプレッシャーを感じるんだから。

「一応立会人がそろうまで待つていてくれ、人間と鬼の代表同士の真剣勝負だから見たがる人間も多いんだ」

「わかつた、じゃあそれまでは適当にしてるよ」

俺はそういうと萃香の方に向かつて歩き出した、そして十メートルほど前で立ち止まる。

「今日はよろしくな、お互い頑張りうじやないか」

「あんたが力道を倒したって言う人間かい？ その強さをじんじん  
ぶつけてくれると嬉しいんだけどねえ」

俺だつてもうけがの方も治つて万全な状態なんだ、せいぜいいい勝負ができるだろつさ。

さてと、まだ時間がある少し話でもしようかな？

## 壮絶で大規模で真っ直ぐな破壊の力

鬼と戦うにあたって気をつけるべきこと、それは前回の戦いから学んでいる。

まずはあの馬鹿力、あのクレーターを作り出す体術はすさまじい威力がある、あれは一発でＫＯされてもおかしくはない。

二つ目はあの防御力、直接殴れば吸血鬼の拳でさえも跳ね返すあの硬さは尋常ではない。能力を当てるしかないだろうが……炎が直接聞かない可能性もあるために霧でしか攻めることができない。

しかしこちらには飛行能力という大きなアドバンテージがある、しかしこれは向こうの能力を考えるとあまり意味がないだろう、となるとあくまで手段の一つでしかない、決め手にはならない。

やはり、最終的にものを言つのは俺の火力だ。こう悩んでおいても結局そこにたどり着く。

一筋縄ではいかない勝負を受けたもんだ、まったく。  
なんか帝からふんだくつてやるつかな。けど金は陰陽師の真似事で腐るほど……いやこの場合は錆びるほど入ってきていい。

それこそ庶民には手の届かないような額が。

話がそれたが早い話、俺の全力での防御を打ち破れるかつてことだ。

まあ破壊力なら何度も言つが自信はある、おれらく通じない」とはないだろ？

「あんた……霧とか言つたつけ。今年齡はどんくらいなんだい？」

「なんだいきなり……まあさうと二八〇〇年くらいかな」

「俺だつて端数は覚えていない。しかし何でいきなりこんなことを聞くんだ？」

「なるほどねえ、そんだけ生きてるんならその強さも納得がいくかな。まあ今日はその力を存分に見せてほしいもんだね」

「わうこう」とか、まあ心配しなくとも全力は出すよ」

と、そこへ俺にとつてのメインゲスト？ が現れた。

「霧ヶ、せっかく私が見にきてあげたんだから絶対に勝ちなさこよ」

「輝夜か、まあせいぜい期待にこたえるとするよ」

さつきから、ギャラリーの様子を見ているんだが、もはや雰囲気がお祭り気分の件についてどう考えようか。

戦う一人だけが真剣になつて後の観衆は野次飛ばすのか。それはそれでお祭りみたいでいいかもしれないけども、そんな雰囲気の中での事故つて死んだりしたら洒落にならん。

まあ俺があつさり負けたらかつこ悪いので頑張つて対処するけども。

……と、そこに帝と桜花がやってきた。話を聞いてみるとどうやら人間側の代表の一人でもある帝を迎えていたらしい。

これで俺の知る限りのゲストはそろつたな？ けどこんな大事にす

る必要性をあまり感じないのは俺だけであろうか？ 帝曰く一種の祭りのよつなものだと思つてくれればいいとは言われたけどもなあ。本当に祭りでこんな殴り合ひする俺らって何なんだろうとか考えてしまひ。

「さて、ギャラリーは全員集まつたつてや」

そつ言われて氣が付くと入口のところには既にたくさんの鬼と何かの人間が集まつていた。輝夜や帝も含まれる。

何重にも張られた結界が俺達のことをどんな風に思つているのかを物がついている。

まるで要注意人物みたいな扱いだ。

「さて、じゃあそろそろ始めよつじやないか」

「まあ…… そうだな、死なないよつて呪をつけよつぜ」

何とも微妙な雰囲気で始まるんだなあ、もうチヨイなんとかならないのか？ 作者さんよお。

俺は周りに炎を出した。結界ぶち破らないか心配だ。

なんだかんだいってお互に真剣な顔つきになつたときには、ギャラリーも静まり返つた。俺だつてまつすぐに萃香を見つめている、先に手を出すのはどちらだ？ 先手は俺に譲る気か？

なかなか幕開けが来ないのもさびしいので俺が先に仕掛けることにした。岩の地面を伝う炎が萃香を襲う、どのように対処するか見てみるとするか。

萃香は炎を一瞬だけじっと見つめると、中央を突つ切るよつた馬鹿な真似はせずに一步後ろに下がつた。

その隙をついて俺が飛びかかるが、萃香は紫黒の大剣を受け流し、俺に蹴りを入れてくる。

俺はそれを紫黒で受けとめ、その勢いで遠くに着地する。

萃香は大きく跳躍して炎を飛び越え、再び燃え盛る地面をはさんで向かい合つこととなつた。

俺は炎による牽制だけではだめだらつ、そこで思い付いたのがこの作戦だ……

ただ霧をぶつけるだけではだめだらつ、そこで思い付いたのがこの作戦だ……

俺は天井に霧を当てて、大規模な落盤を起こした、そして落ちてくる無数の瓦礫で萃香を埋め尽くす。

もちろんその程度で倒せるとは思っていない。そこで無防備になつた萃香に霧をかけしかけて不意を突く作戦だ。

落ちてくる瓦礫、萃香の意表をついて姿を覆い尽くすことには成功した。

そして破壊の霧にそれごと壊させる。

すさまじい爆音がした、そして砂煙が消えたそこには……

萃香の姿はいなかつた。

なんだ？ 俺は少し考え、そして気がついた。

そして萃香の意図に気がついた時には手遅れだつた。そう、俺は萃香の能力でどんなことができるのかわかつていたはずなのに……

真横からの萃香の蹴りに気がつけたのは最早奇跡だろつ。

萃香は霧になつて俺の攻撃を回避し、俺本体をたたくつもりだつた、そしてその作戦はほぼ成功したのだ。

紫黒で速効作り出した大剣で受け止めるが、そんなもので鬼の力を相殺できるはずがない。

俺はあっけなく吹っ飛ばされた。

このままでは壁に叩きつけられて氣絶して終わりだろ？、俺は持っていた大剣を地面に突き立てた。

面が広い方で一気に止めようとしたのに地面を削つてガリガリと音を立てて移動するのはさすが鬼と言つべきだろ？。しかし俺を倒すには一歩足りなかつた。

追撃に来ていた萃香は、この結果に表情を歪ませる。おそらく反撃に対する対処など考へないで止めを刺すつもりだったのだろう。

そしてそんな状況で俺の攻撃を受け止められるはずがない。

「終わりだあああああああああああつー！」

俺の全力の叫びとともに放たれた霧は、俺の左手の甲全体から血がにじみ出て、それだけではなく左手全体のいたるところに亀裂が走つた。正直かなり痛い。

そしてそんなになるまで力を振り絞つた俺の全力を受けた萃香はどうなるか？ 亜音速で壁に叩きつけられる羽田になる。

……やばい、これ死んでもおかしくない威力だ。

そして全てがスローに映る中、萃香の体が霧の中少しだけ見える。

あのまま壁にぶつかれば本当に洒落にならないぞ、もつ既に全身から失血してるに違いない。

すると、突然萃香の体がぶれた、そして消えた。ほとんどの人は見えていないはずだ、何が起きたのかもわからないだろう。

しかし俺にははつきりと見えた。萃香を霧の中から攫い出した人影を、一本角のシルエットを。

そしてついに壁を貫通し、外の景色が見えるほどになった、新しく俺の手によつて作り出された通り道の脇に足をおろした。

「萃香はもう戦えない、あなたの勝ちだよ」

星熊勇儀だ。萃香の身が危ないと悟り、救い出したのは、あるいみ俺らよりも化け物なんじゃあないか？

「ともかく、助かったよ。このままだ行けばただでは済まなかつただろうからな」

「なあに、『れぐら』お安い御用や。同族が下手したら死ぬかもしれない状況で黙つて傍観できるほど安い性格はしてないんでねえ」

なるほど、鬼らしい意見だな。

「しかし、以外に萃香もあつさり負けちまつたねえ。もうちょい粘つてくれると思つたんだけどさあ」

「俺の方にだつてそつくりそのまま返つてきてるんだよ。ほら、左手が血だらけだ。蒸発しきれなかつた奴が残つてんのさ」

実は相当痛い。粉碎骨折よりもこつちの方が痛い。体感的な話ではあるがまあ吸血鬼の治癒能力があればすぐに治つてしまつだらうが、けども血が足りないな。このまま倒れてしまおうか。

俺の意識はそこから混濁していった、そこから先のことは覚えていない。

## 壮絶で大規模で真っ直ぐな破壊の力（後書き）

やばい、なんかおかしい。

つまらないからって切らないで～うまく書けなかつたんです。本当に自分でもどこがおかしいか分からんんですね。

次はもつと面白くしますから（汗）

思つたんだけどいま作者がネタにしようとしていることをやつてつたら原作に全然入れない気がする。

じつはいつそのこと原作入らないで突き進んじゃおうとか思つてるんですけど。

そりへんどう思ひますか？ よろしければ意見を聞かせてください。

つーかサブタイがネタ切れ気味。どうしよう。

高藤は巡りきて彼は自分に嘘を付く

鬼との勝負から約二ヶ月ほどたつた。

あの後日が覚めたら輝夜に抱きつかれるし、全身が痛いしで結構さんざんな目にあった。

もう既に傷は完治していて以前の状態に戻っている。そして、俺にとつての大きな変化があった。

俺は鬼との勝負から、接近戦以外でも十分に霧や炎に頼らずに戦うことという課題を見つけ出している。

そして新しい紫黒の使い方を発見した。それが俺の戦闘時における選択肢を大幅に広げることとなつたのだ。

紫黒をなにもない空間から生み出して放出する、いわば遠くを攻撃できる使い方ができるようになったわけだ。

そんなに遠くから発射できるわけではないが自分の周りから針を生み出して無数に飛ばすというような使い方ができる。

結構威力があつて的を小さく絞れば鋼鉄の壁をもぶち抜く優れものだ。

それに俺が相手に近づかず、代償もないために接近戦が強力な相手にも対応できる。これから先はどんな相手と戦うことになるのかわからないから戦略の幅は広い方がいい。

そういうば今日は帝が来る日だつたつけ、だからこんなに周りが騒がしいのか。

しかし俺が日を覚ました時の帝の反応は面白かつた、俺のことすんげえ揺さぶつて輝夜もどん引きしてたな。あんなに揺らして傷口開いたらどうするつもりだつたんだよ。俺は着物汚しても弁償なんてしないだ。

しかしもう輝夜の屋敷に住み始めて四か月にならうとしている、このままいけばあと八ヶ月程度でこの生活も終わりなわけだ、今のうちに存分に楽しんでおこう。

まあおそらく歴史どおりに物事が進むのだろうしな。

「あと、なんの日も落ちてきたし外に出るかな」

いつも平和なのはいいことだ、ずっと続けばいいの……おつとこれはフラグか。今のはノーカンで頼みたいものだ。

そういうば輝夜はどこかな？ いつもなにこの時間に俺の部屋に遊びに来るのに。

うや、俺の部屋に遊びに来るのについておかしいな。輝夜にとつては自分の家の中なのに、俺の部屋に来るが正しい表現か。  
まあいろいろ忙しくつたつておかしくはないだり、一日会えないだけでも機嫌斜めになるんだけどな輝夜は。まあそれが輝夜らしいといふべきか。

……しかし暇だな、することができなくて。

「ふむ、つまり近いひで攻めてくるところ」とか？

「はい、それで間違いないでしょう。現に多くの妖怪たちと結託してこます、草によれば三日後に活動を開始するとのことです

帝は惱んでいる。今回の敵は妖怪ではなく人間だということ。

「あまり公には出来ん。密命を出す」

「では誰にこのことを伝えましょう？」

「今日、日が暮れてからかぐや姫の屋敷に行く」とは知つておるな  
？ その時に霧殿に頼もうと思つ

非常に不本意ではあるが彼にしかできないであらへ、と帝は付け加えた。

「本来なら彼にばかり厄介事を任せるのは気が引けるのだが……都の陰陽師には荷が重すぎる、都最強の妖怪の世話になるしかないの

でな

帝は「」の従者に「伝えた、「決して彼に責任がいかないようになり、もし彼が攻められるようなことがあればどうなるかはわかつているな？」と。

従者は答えた、「承知しました」と。

そして部屋の外から声が聞こえてきました、「帝、お出かけの準備ができました」と。

俺は輝夜に呼ばれて広間へときた、そこではすでに宴会の準備は整つている。

思つたんだけど俺つて輝夜のお気に入りつてだけでここにいるんだよな、改めてかぐや姫の権力を思い知った。

「しかし」いつまで何回も宴会してるけどあきたりしないの?」

「そりゃあおんなじ」と何回も続けてたら飽きるわよ、だからいろんな場所でやるの。庭だつたり和室だつたりこうじて広間だつたり

なるほど、発想が金持ちだ。

けどまあ帝も飽きずに入るわな、だって俺がここに住み始めてから

一十回は来てる。

そんなに輝夜が好きか、御執着か。まあ輝夜も嫌いではないらしいんだけど。いやだったら一緒に難題吹っ掛けたことだ。

なるほど、妙に説得力がある。

「ん？ 帝が来たのかな？」

「やうみたいね、今日はいつもより来る時間が遅い、もう少し早くてもいい気がするけど……まあ考えすぎだろ？」

さてと、今日も今日とて始まる宴会。まあ楽しむ感じやないか。

宴会終盤、今日はなにやら帝の様子が挙動不審なのは気のせいであろうか？

なにやら俺と田を合わせるのを避けている気がする。  
俺の気のせいであろうか？ まるで俺を怖がっているような……少し違うな、まるで絶対無理なことを頼む時のような気まずさを持つ

ている。

「輝夜？ 何か今日の帝変じやないか？」

「そうね。確かに遅れてくる」といって、こんなにそわそわした彼は初めてかもしれないわね

だろう、やっぱり俺だけじゃがないんだ。  
なんでだろう、その理由がつかめない。俺たちに関係することなのだろうか？ 帝一人でしまっておかなくてはならない問題なのだろうか？

俺のことを信頼してるなら教えてくれてもよさそうのこと。

「まあ……別に構わないけどさ」

俺は小さくつぶやいた。

しかし、時間がたてば時間がたつほど何かが変わっていく。まるでに何かにあせらされるように。何か慌てた雰囲気だ。

そして、帝の方から声をかけてきた。

「少し外まで来てくれぬか？ 話がある」

「……わかりました」

あきらかに何かある雰囲気である。

とはいっても断るわけにはいかず、俺はついて行くことにした。

「こんな突然呼び出して何なんだ？」

帝は何かを決心したようにうつむき、俺に向かって話し始めた。

「なあ霧よ、もし初めて霧と会ったとき儂がお前を殺すように命じていたらどうしていた？ 儂らを殺したか？」

「何だいきなり、まあどうあえず出来るだけ殺さないよう逃げるわな」

帝はまた質問をする。

「もし、人間が妖怪と全面対立して、人間と戦わなければならなくなればどうする？..」

「逃げるぞ、俺は今でも心は人間だ。今までだつて殺さずになんとかやってきた」

「じゃあ今ここで人間を殺してくれと頼まれたらどうする？..」

「何が言いたい？」

俺は帝を軽く睨みつけた、「うしおが早いのはこままでから学んでいる。

「密命を受けてほしい」

「……理解した」

要するに、人殺しをしろってことだな？

密命と言つくらいだからあまり公にできない話なんだらう。汚セモうなことだ。

「やうだ。霧には妖怪と結託し、都に攻め入ろうとしている計画をつぶしてほしい。申し訳ないが……関係者は全員口封じしてくれる」と助かる

……おそらく、一人でも逃がせばそのことが世間にばれることを避けたいのだろう。

仮にも人間を殺すわけなのだから、それもまだ何もしていない。おそらくあまり人耳には良くはないだろう。

俺だつていい気はしない、いくら妖怪と結託しているからと言つて人間を排除するという考え方。けれども帝としてはしなくてはならない、民の安全を第一に考えると不安要素は消し去らなければいけない。

そして知つてゐるだらうか？　一度裏切られた人間はどこまでも冷

酷になれるところ」といふことを。

「わかった、受けよつじやないか」

「助かる、本当にすまないな」

それでも自分は自分の気持ちより恩義を優先させてもいい、俺はこの帝の作る街がとてもいいものになるのならば自分に嘘を付く、それが自分を苦しめることにならうとも。

そして驚くほど冷静な声で聞く。

「決行はいつだ？」

「明日の夜、ノルマは全滅だ」

俺は、その後聞いた話だがその時の俺は少しだけ怖かったらしい。

一度裏切られた彼は冷酷な色へと染まつていた

俺は今まで人間を殺したことはない。

何があつても決して殺さずにやつてきた、たとえそれがどんな場面であろうとも。

けれどもそれが今日の夜で終わる、帝の頼みとは言え少々心苦しいものだ。

今更殺すことに抵抗がない自分も怖い。もう心まで妖怪になつてしまつているというのか、それとも一度裏切られてこころが麻痺してしまつているのか。

それすらもわからない。

だが、それをしなければならないというのもわかる。「俺は帝の作る都」を支援すると決めたんだ。そのためには相手が人間といえども手段は選べない、害をなすものは消さなくてはならない。

「それで、その家にいる奴全員が対象なんだな？」

「草は全員避難させてある、手加減などいらないぞ」

それはわかっている、ともかく今夜日が暮れてから……とはいっても、もう日が落ちかけている。密命開始まであと三十分もないどう、調べによると日が沈んでからすぐの時間帯に全員集まるこことなるらしい。

「そりいえば、近くに人は住んでないのか？ いくらなんでも隣の家の住人に気づかれるなって言うのは無理な話だぞ？」

「それに関しては大丈夫。もとからまちから離れた所に屋敷を構える変な金持ち、ほれ、町の西は森じやろう、そこに家を建てているのだよ。まあ今まで妖怪に襲われずに済んでいる時点で怪しむべきだつたのかもしないがの」

なるほど、つまりある程度は遠慮なくやつていいわけか。それはありがたいな。

「隠蔽工作はきちんとしてくれるのか？」

「もちろん、一応屋敷の騒ぎが聞こえてくる範囲の住民には屋敷に招待を送っている。なあに、ここ最近であちこちの住人をまとめて呼んでは意見を聞くなんてことをやつてるのでな、怪しまれはしないとて」

……ははあ、なかなかの策士じゃないか。なかなか手が早い。やっぱり侮れないな帝は、まあそりじゃなきゃ帝なんて役職にはつけていないだろうけど。

ともかく、俺の「楽しいお仕事」はもうすぐ始まるわけだ。準備を始める、準備とはいっても栄養摂取しかすることがないんだけどな。あとは鉄分とかちゃんととる」と。

「さてと、これから大一番だ。気取らずに行けるかな？」

「様子はどうだ？」

「ここ、じゅうやら話し合ひを始めた様子です。じゅうやら草が抜けた分以外は全員集まっているとのこと、数えられただけで百は超えております」

「やつか……そろそろ霧を呼べ、彼に全てがかかっているんだ……」

帝は、「こんなときに自分に戦つすべがあれば」と、そんなことを考えていた。

彼とて、親友を傷つけたくはなかったわけだ。

「どうなるのか……何事もなくことが進めばよいのだがな

密かに祈りを捧げる帝は、誰に祈っているのかもわからなかつた。

「霧殿、準備は出来ておりますか？」

ああ、確かにこいつは帝のそばにいつもいる奴だ。名前はなんだったつけな？　たしか帝の直属の召使いの中で一番足が速いんだ。

「ああ、いつでも行ける」

これから人間妖怪関係なく殺しに行くつてのになんだかいまいち実感がわかない。

これじゃあいざ殺めた時が一番怖いな、反動が大きく返つてきそうで。

「案内してくれるか？」

「はい、ついてきてください」

そして案内されながら俺は思い始めた、だんだんと町のはずれに来ていると。

たしかに好き好んでこのような場所に住むというのはそれだけで怪しいだらう、ましてやそこそこ金持ちらしいしただの酔狂でしかないと思うのだが……

そして一行は森の中へを進軍していく、とはいっても全部で四人しかいないのだけど。

ともかく、結構険しい道のりだった、道路が整備されているわけで

もなく獣道を通っているという感覚が一番近いのかもしれない。

周りの木々がどことなくこちらを不安な気持ちに追いやるかのような威厳を見せており、それはおそらくかすかに残る妖力のせいであろう。まあまず都の陰陽師には気付けまい。俺だって本当に注意して探らなければわからなかつたんだ。人間で見破れるとなればそれこそ最強の陰陽師を名乗ることが許されるだろう。

そんななかを歩いて行くと一つの大きな屋敷が見える、貴族の屋敷と何一つ変わらないつくりだが、中から発せられている微量の妖力に違いを見せつけられる。しかしここまで隠し通せたことに関しては称賛を贈ろう、確かにこれは言われなければ気付けまい。

これは、力が小さすぎて気付けないのではなく、巧妙に隠されていて気付かないタイプだろう。かなり手ごわいやつまでいることも予想されている。大妖怪クラスもいるかもしれない。

「ここまでいい、あとは俺がやる」

「わかりました、どうかご無事で」

……わかつてゐるさ、帝に変な責任をおわせる必要なんかない。俺がすべて丸く収めてしまえばいいのだ。それが後味の悪い方向に向かおうともな。

去つていく従者たちを見ながら俺は思つ。

ここまでの大妖怪敷、全力を出さず越えられるだろつかと。できるだけ騒ぎは小さい方がいいけども……。

「……俺の吸血鬼としての器量が試される、なぜだかわからないけどどう感じた。」

誰にも気づかれないうちに全てを終わらせる。それができたら最高なのだが……

「とにかく、やってみなきゃあ始まんないよな……」

とりあえず侵入してみることにした。

玄関から本殿に行くまでは誰もいなかつた。おそらくは警戒を全くしていない証拠だろ？

まあここまで気配を隠せるのなら確かに要らない気がするが。

そして建物の中に入つていくと、妖怪が一人だけいた。なぜここにいるのかはわからないうが、見つかるとまずいので早速消えてもう。

俺は名も知らない妖怪の背後に回ると紫黒で首をかつ切つた。後には死体だけが残る。正直声を全くと言つても上げなかつたことには感謝している。これでまだ探索を続けられるからな。

しかしこれでは進めば進むほど氣分の悪いことになつて行きそうだ。これからどこまで冷酷な色に染まらなければならぬのか。それを

考えただけでも気分が悪くなつてくる。

まあこれも自分で決めたことなのだから、後悔はしていないが。

そして進んでいくと、何人かの妖怪が話しながら廊下を歩いてきた。話を聞いているところから見張りに出るらしい。

どうやら誰も見張りがないのは油断などではなく、ただたんに交代の時間だったと言つことだ。これは運に恵まれたな。

そして、俺の隠れている部屋の前を通り過ぎた瞬間に行動を起こす。影からそっと紫黒を使い、全員の体を串刺しにした。

これもまた断末魔をあげる前に口をふさぐ、声にならない悲鳴と、困惑の表情をしながら六人の妖怪たちは死んでいった。

この調子じゃあどのくらい時間がかかるかわからない、正直まとめ相手にできると助かるんだけどな。

まあ大妖怪クラスもいるわけだし、むしろ奥の方に入つたこれからが本番なのだろう。

おれは、一瞬だけ深呼吸をしてから奥へと進んで行つた。

進んでいくうちに、話声のする部屋があつた、中から感じられる気配からするに、結構力の大きい妖怪たちもいるらしい。

これは結構なチャンスである、声の種類だけでも十人はいることがわかる。一網打尽にするチャンスもあるわけだ。

俺は紫黒を構えて部屋を覗きこむ、幸い誰も俺のことなど気がついていない。

おそらくはここまで来れるわけがないと思つてゐるのだろう。それが命取りだ。

俺は部屋に滑り込み、手始めに田の前のやつを吹っ飛ばす。全員がこちらを向いたが無視、面倒なので全員紫黒を飛ばして卑刺しこにすることにする。

俺の周りに紫黒の針が人数分、十一本ほど現れる。そして一斉に飛び出して全員を貫いた。

これはおそらくみな即死であろうが……

そう、俺の詰めが甘かつた。そう、新たに部屋に入つてくる妖怪、そしてそいつはおそらくこの状況では当たり前の行動をとつた。

「誰か来ててくれ——侵入者だ！」

畜生……騒ぎにしないでつて言つのはここまどか。せつかく上手に行きそうだったのに残念だ。

俺はとりあえず叫んだ妖怪をこれ以上声を出されないように口封じする。そして無数に聞こえてくる足音を迎撃つことにした。

まず、廊下の角からこちらに曲がつてきた妖怪に向かつて走り出す。そしてあとからついてきていた妖怪一人ほどをまとめて霧に包み、壁」と破壊した。

この面でおそらく屋敷中に気づかれてしまったが問題はない。まとめて倒すだけだ。その方が効率もいいし能力の使用も少なくて済む。

とつあえず下手に隠れられないように周りの壁をすべてぶつ壊す、ある程度巻き込まれてくれたらそれでいい。

破壊の霧が俺の周りで渦巻いている、そして俺の周囲だけとでも広々とした空間になった。

隠れていた連中も慌てている。

そしてそういうやつらに「端から紫黒を飛ばす。紫黒の針は、まるで投げ槍の槍のような感じで、とても使い勝手がよい。まさにこういう場面でも全方位に発射できるために死角への攻撃までカバーできて文句もなしだ。

何人かが残ってしまったがそこは各個撃破でどんどんつぶしていく。紫黒で直接貫いたり、霧を使ってふつ飛ばしたり。

さすがに建物ごと燃やすような真似は俺だつてしない。まあもしかすると証拠隠滅のために火事にするということもあるかもしけないが……といったかここまで来てしまったらするしかないだろう。

けど今は我慢だ。どじくとに紛れて逃がしてしまったら元も子もない。

そして俺は新たに壁をぶち破り、奥の方へと走つて行つた。

そして廊下に飛び出し、まだ壊されていない通路を走る。騒ぎ声が

聞こえなくなつたことからもう残り少ないといつことがわかる。こんなにあつさり進んでしまつことに不自然さを覚えながらも俺は走る。

そして新たに部屋を開けると、そこには妖怪ではなく……一人の人間だった。

そう、一人の人間が部屋の隅で小さくうずくまつているだけだった。おそらくこいつが今回の首謀者だらう。少しお話しようぢゃないか。

「なあ、ちょっとといいか？」

「なつ……お前が侵入者か！ 誰か、誰か来てくれ——」

しかし、答える声は何もない。

「残念だけど、もう全員死んでるよ。残つてるのはお前だけだ」

俺は冷酷に、残酷に事実を突き付ける。いつもほうがこういう奴は嘘がつけなくなるんだよ。冷静さを失つて偽りを言つ余裕なんかなくなつて。その結果自分の知つていることしか言わなくなる。といふか言えなくなるんだ。

「さてと、お前が首謀者でいいんだな？」

「違う……絶対に違う！」

「本当か？」

少し睨みを利かせれば……ほら、たとえばこいつやって持ち上げるとかしてさ。

「わかった、俺がこいつらをまとめてた。わかったから離してくれ！」

「そりゃ、お前が犯人なわけだな？」

「こいつって自由じててくれる。

「最後に聞くけどこいで全員か？」

「ああ、全員だ。もう終わりなんだよ……もつ何もしないから助けてくれよ……」

「残念だけど、ここで逃がすわけにはいかないんだ。だからおとなしく死んでくれ」

最後は断末魔も上げなかつた。ずいぶんあっけないものだと俺も思う。

そして初めての人殺しは、なにやら生ぬるい感触しかしなかつた。

「さてと、最後に全部証拠を消すとするか

俺は燃え上がる炎を出し、あたりを燃やして行つた。  
あと二十分もすれば、ここには黒じげの屋敷と一人の人間の死体しか残らない。

月の姫君は地上の騎士に何を見るか

「じゃあ後は俺はすることはないんだな?」

——ああ、ご苦労だつた

あのあと屋敷を燃やすのは、一十分くらいですぐ終わつてしまひ。迎えが来るのを待つのも面倒だったので、じから帝のところに報告しに行つた。

もう後に残っていることは帝の方で済ませてくれるそうなので、俺はそろそろ屋敷の方へ戻ることにする。

しかし、なんだか疲れたな、体も重いしどうしたんだろう？ 確かに結構暴れたりはしたけどもそんなに消耗はしていないはずだが……あれ？ なんかくらくらしてきた。

「霧殿！ どうした、大丈夫なのか！」

突然倒れた霧を抱きかかえるように叫ぶ帝、明らかに異常があるのは目に見えているために声が大きくなっている。

「誰か医者を呼んで来い。あと横になれる場所と水を！」

帝は自分たちでできるであろうことをするためにその知恵を振り絞る。けれども相手は吸血鬼、人間の常識が通用するとも限らない。

「とにかく出来る限りをやるが、」

このとき、帝が本気で走るのを従者たちは初めて見たといつ。

田が覚めてみると、見知った屋敷の天井が見えた。

輝夜の屋敷だ、どうやら俺はあるあと……どうなったんだ？　まあ状況的に気絶か何かしたってことだろう。

しかし、どうしていきなり倒れたりしたんだ？　考えられるのは力の使いすぎか、積もり積もつた疲労か、他の精神的な要因か……わからない。

ただ、今はいつも以上に調子がいいことはわかる。何があつたのだらつか？

「せひと、とりあえず誰かを探さなきゃならないかな……」

よくよく思つと、今自分が寝ているのが輝夜の部屋だとこうじて気がついた。いつたいなぜ？　起きたら輝夜の部屋にいたなんてどこのフラグだよ。

ともかく誰かいないかな……

と、部屋を出ようとした瞬間に襖が開いた、そして向こう側からは輝夜が。

……正直とても気まずい。あのトイレの個室から出てきた人と田があつた時よりも微妙な感じがする。なに、たとえがわかりづらい？　文句は作者に言つてくれ。

「あ、えっとおはよう」

「……本当に霧？」

えつと、霧ですかどなにか？

「あんたひとをどんだけ待たせれば気が済むのよ。自分がどれだけ寝てたかわかつてる？ ハか月よ、ハか月もずっと寝てたんだから！」

「ハか月！ んな馬鹿な。そんなわけないだろ！」

ハか月も寝てるなんて正直考えられない。けど輝夜がここで嘘を付く必要なんて全くないないんだよな……これは信じるしかないんだろうけど。

「えつと……良くわかんないけど悪かった」

「……ちょっと一人にさせて頂戴」

あれ？ なんかご機嫌斜めなんですけどどうじょう。といつか何か暗い感じでいつも輝夜となんか違う雰囲気が……

と、俺はそこで理解した。俺はハか月の間寝ていた。つまり輝夜が月に帰るまではあと一ヶ月くらい。つまりそろそろ次の満月の時に行が来る時期なのだろう。

ともかくいつたん一人にさせてやるか。これは俺だけではどうしようもないだろう。

輝夜が自分からこのことを言いだすまで待つしかない。下手に何か知っているそぶりを見せたら明らかに怪しいだろうからな。神奈子と諭訪子は俺がかぐや姫のこと知ってるの知ってるけどな。それとこれとは話が別だろ！」

俺は輝夜の部屋を後にした。

その日の夜は、帝が屋敷の方に駆けつけてきた。どうやら俺のことを本当に心配してくれたようだ。俺としても感謝しなくてはならない。なんでも俺が倒れた時、医者を呼ぶように指示したり介護してくれたりしたのは帝らしいからな。

そして、俺は帝に紹介された医者から詳しい話を聞いている。

「……なるほど、血が極端に」

「はい、あなたの血液が極端に少なくて、薄かったのです。おそらくは今回の眠りも体の機能が十分に働かないために、自己防衛のようなもので眠りについたのでしょうか？」

そして一言付け加えられた。

「まあ、おそらくこれだけ長かつた理由はおそらくほかにも理由があると思いますけどね、それがどういったものなのかはわかりませんが」

……つまりは能力の使い過ぎで体調を崩したと。まあ自業自得なわけだ。

けどまあそんなこともあるんだな、確かにハイリスクハイリターンな能力だが。それでも今までこんなことはなかつたのに。

まあおそらくはこの間一度にたくさん能力を使つたからだろう。あれほどまで大規模に使用したのは確かに初めてだ。

「つまりは能力の使い過ぎには注意しろってことですか」

「はい、まあ滅多に今回みたいにはならないとは思いますけど……一応それだけの生命力があれば滅多に大事になることはないと思います。あくまで人間の常識ですけど」

なるほど、まあ人間も吸血鬼も根本は同じだし医学でも通じることもあるだろ？  
とにかくこの医者には感謝しなくてはならない。

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、医者として当然のこととしたままでですよ。では私はこれで」

そう言つて部屋から出て行つてしまつた。そして入れ違いで入ってきたのは帝。  
おそらくかなり心配をかけてしまったのだろう。帝のことだから自分の依頼のせいで俺が倒れたとかそういう感じに捉えてるかもしれないし。

「もう大丈夫なのか？」

「ああ、とにかく助かったよ」

とにかく、じうじて変わりなくて何よりだ。

「ヒロイド霧よ、かぐや姫の様子がおかしいとには気がついたか？」

ああ、やつぱりこの話題になるのか。まあ帝が心配する気持ちわかる気がする。

俺だって事情を知らなければ何事かと思ひだらけ。

「はい、なにやら元気がないようでしたが」

「そのことなのだ。ここ数ヶ月かぐや姫が元気がなくての、毎晩月を見上げては何やら考え方をしているようだな」

……やっぱりか。おそらく月に帰る日が近いのだろ。そろそろこの生活ともお別れか。

「なにか心当たりはないかの？」

……ここで正直に答えるわけにはいかない。ここは知らないふりをしておこうか。

「わかりませんね」

「やうか……まあ何かあれば彼女の方から何か言つてくるだろ？」「

と、そこへ帝の従者の一人が部屋に入ってきた。

「帝、かぐや姫がお呼びです。霧殿も広間の方へおいで下さー」

「わかった、すぐ行け。霧殿もほら」

「そんなせかさなくとも行くつて」

俺はついて行きながら考える。このタイミングで俺や帝に用があるつてことは……まさか？

そして広間に集まつた一同は、輝夜の方へと皆注目していた。そして輝夜がゆつくりと口を動かす。

「みなさん。突然のことですがお聞きください。私は次の満月になつたら月へと帰らなければなりません」

一同にざわめきが広がる。

そして輝夜は歴史通りのことを説明し始めた。自分が月の住人だといつことや、蓬萊の薬のこと、そして次の満月で迎えが来て、月へと帰らなければならぬこと。

それだけ言つと、輝夜は自分の部屋へと入つて行ってしまった。

後に残された者たちの中では、様々な声が飛び交っている。信じられないといったものや、何としても阻止しようとしたもの。色々な色だった。

帝はと云つて……

「霧よ、かぐや姫のところへ行つてやれ。今の彼女にはおぬしが必要だらう」

俺はそのまま葉につなぎで返すと、輝夜の部屋へと向かって言つた。

「輝夜、入るぞ」

俺は一応一声かけてから輝夜の部屋へと入つて行つた。そこでは輝夜が月を見上げて悲しそうな顔をしていた。

輝夜は、おそらく月に帰らなければいけないことを悲しんでいた。だからそれでなければあんなに悲しそうな顔をするはずがないから。そこら辺は原作通りなんだろう。

だったら、俺が背中をひと押ししてやればいい。輝夜が月になんか帰らずに、永琳と一緒に永遠亭まで逃げるっていう覚悟を決められるように後押ししてやればいい。

まあ永琳が来るのを知らないんだから、地上のどこかに逃げるようになだが。

「輝夜、本当の気持ちを云つてみて

「いきなり何よ、私は月に帰んなきゃならないの。だつて月の科学はすごいのよ、私たちじゃ逃げ切れるはずもない。おとなしく捕まるしかないの」

なるほど……これは典型的な例だ。月の力の前に卑屈になってしまつていい。

「本当にそれでいいの？ 輝夜はここに、地上の民が大好きなんでしょう？」

「……煩い、だからって霧たちに何ができるの？」

「できるよ、俺には力があるからね。月人なんて簡単に追い返してやるよ」

輝夜は、一瞬だけ俺の方を見たが、すぐに月の方へと視線を移してしまった。

「月の方にね、残してきた人がいるの。私はその人に会いたいの、だからね……」

永琳のことか、それが来るなんて俺が知つてたら不自然だよなあ。ここはひとつ、ご都合主義とやらに頼つてみるか。

「そんなに大事な人なんだつたら、向こううだつて早く会いたいはずだよ。だつたら来てくれるんじゃないかな？」

少しでも、輝夜に地上に残りたいと思わせること。それが俺の今の仕事だ。

「それじゃ、一回逃げちゃえばわかんないんじゃない？ だつて地上はこんなに広いんだ、月人だつてどこにいるのかわからない一人や一人見つけるのなんかできるわけないだろ」

……俺が言えるのはこのくらいか、けどもうまい具合に進んでくれるかなあ。

「……ねえ、もしも私がどこかに逃げ出してしまったって言つたら手伝ってくれる？」

「ああ、もちろん」

……手」たえはありが。これは眞田にかけるしかないかもしそれいけど。

## 騎士は姫君を守る盾であり剣でもある

運命の日がやつてきた、今日は満月。月からの使者が輝夜を迎えて来る日である。

輝夜の屋敷の周りには大勢の兵士や陰陽師たちが並び、おそらくは厳戒態勢であろう。都全ての実力者を集めているとは言つても過言ではない。そのくらいの規模の人数が集まっているのだ。  
これで帝の権力と、かぐや姫という存在がどういったものなのかを改めて再認識せらるることになった。要するに一人ともすげえ。

そして俺は、輝夜の一番近くにいることを許されたというか任されたといふか……とにかく俺は輝夜と月の使者との交渉に割りこめる存在になつてしているのは確かである。まあこのよつたことにならなくても実力行使でむりやり押し入つてやるが。

そして輝夜はと黙つとビートなく緊張した顔つきだ、やはり怖いのであろうか？まあそれが当たり前のような気がするが。

そして俺はできることを最後にしてしまおう。

「輝夜、今日一田くらゐ我儘になれ。自分の思つた通りのことをすれば絶対に後悔はしない。最後に決めるのは自分だ」

「…………うん」

やはり返事の声が小さい。まあこの状況で普段通りのテンションを求めるというのも無理な話かもしけないけど。  
けど元気がない輝夜を見ると、なんだかこぢりさせつてあげたいところかそんな気持ちさせられる……これがカリスマとこづやつなのか。

……月の使者がもうすぐ来ることは確かである。万全の態勢で迎え撃たなければなるまい。

場合によつては戦闘に……いや、おそらく輝夜が逃げることを選択した場合間違いくなるだらう。といつか原作通りに行くならば間違いなくなるのだ。

そうなれば俺が最後の砦だらう。おそらく月の最新兵器に対応できるのは俺だけだ、他のやつらはどうこつものかもわからないうちに戦われるのが落ちだらう。

とにかく、永琳は戦力として加えられるであろうから一人で輝夜を逃がさなければならない。迷いの竹林の場所は知らないが永琳がいるのならたゞり着けるだらう。充分。

つまり俺のノルマは月の使者を全員倒すことではなく、何とかして逃げる時間を稼げばいいわけだ。その気になれば俺が全部ひきつけてしまうという手もある。

まあ引っかかるほど相手も馬鹿ではないだらうけど。

……とまあ、ざつと考へることはそのくらいだ。細かい作戦は考へるだけ無駄であろう。

と、そこで突然輝夜が俺の腕を引っ張つて……

「霧、見えてきたわ。あれが月の迎えよ」

輝夜に言われたとおりに空を見上げてみると、月に黒い点がぽつんと見える。おそらくあれに乗つて月の迎えが来るのだ。そしてあの中には永琳もいる。

外の連中も騒ぎがついたようだ、だんだんと騒ぎ声が聞こえてきた。

「さてと、一応閉めとくからな」

歴史どおり出入口はすべて閉ざしておく。まあ一斉にここまで開かれてしまつたたら意味がない気がするが。一応やつておく。

どうやらもう顔の見分けがつくところまで来たらしく、少しばかり覚悟決めるか。

しばらくすると、外からひとときわ立つ声が少しもれてきた。おそらく月の使者が拡声器のようなものか何かで声をそこらじゅうに伝えているのだろう。しかし、それにも勝るとも劣らない他の連中の声で何を言つているのかはわからない。

そして、襖がすべて開かれて外から丸見えになつた。やつぱりこうなるわけね、いや予想はしてたけど。

そして輝夜は真っ先にこちらへ来た人物に駆け寄つて行つた。もうこの時点で誰かは予想は付くと思うが……

「永琳！　会いたかつたわよ」

「姫様……」「無事で何よりです」

「おお……他人行儀他人行儀。やっぱり久しぶりの再会つて言つのは感動を誘うね、俺は別に平氣だけど。

「永琳、私ね決めたの。ここから逃げ出して地上に住むわ！　月のことなんでもう知らない、私地上が好きなの。手伝ってくれる？」

「姫様……はい、わかりました。では少しお待ちください」

……やっぱりこうなるんだな、俺の説得が効いたか。とにかくそうときまれば俺も手伝つてやう。ここからが俺にとっての本番だ。

「どうした、何をしている永琳」

一人の様子がおかしいことに気がついた月の使者の一人がこちらへと駆け寄つてくる。

俺はそいつに向かつて走りながら輝夜にそつと耳打ちした。

「（輝夜、あとは俺に任せて一人で逃げる）」

「えつ、でも……わかったわ。絶対にまた会いましょう。永琳、あとは霧に任せて逃げるわよ！」

そうだ、それでいい。

そして俺は武器を構えた月の使者を蹴り飛ばした。我ながらかなりの威力だつたと思う。そしてそれが引き金で戦闘が始まった。全部で二十二人、間違いはないな？

「永琳、逃げましょ」

「姫様……あの男は誰なんですか？」

「詳しいことは後、霧なら時間を稼いでくれるわ……（死んだら承知しないんだからね！）」

そして輝夜は永琳の手を取つて走り出す。そしてすぐに状況を飲み込んだ永琳が弓を構えて走り去つて行つた。これで俺が誰も通さない限り一人は安全だろう。

さて、あとは俺にかかるてるわけだ。見れば他の連中全員のびてるじゃねか。

そして俺は大きな声で宣言する。全員の注意がこちらへ向くくらいの声で……

「おまえらの相手は俺だ！ 一人を追いたければ俺を倒してからにしろ！」

すると、俺の予想以上の挑発になつたらしい。全員が俺の方を向いた。

俺は紫黒で周りに倒れてる連中をふつ飛ばした。邪魔になるだけだからな。そして炎で周りの地面を燃やす、向こうは俺の力の大きさに気がついたらしい。全員でかかつてくるようだ。

さあ、防衛線の始まりだ

どうやら主装備はレーザー銃らしい、さつきから光線バンバン撃たれまくつてる。

俺はその猛攻をぐぐりぬけ、早速一人目を仕留めた。そのまま一人めも紫黒で殴つて気絶させる。

返り血で顔が赤く染まるが気にしない。全部終わつた時に考えよう。ただ気分はあまりよろしくはない。仮にも人間なんだからな。けども不思議となんともない。まあ一回殺してしまつているから何があるが。

さすがにそれ以上は続かず、追い込まれてきたのでいつたん退避する。

そしていつたん全体を見渡せる位置に移動する、すると輝夜たちの逃げた方向に行こうとしている奴が一人いた。

「逃がすかっ！」

俺は霧をそいつに向けて放出し、まわりの木々」となぎ倒した。このなかで生き残れる方が不思議である。

そして俺の左手の甲からも血が流れ出す、毎回「ううなのでもう慣れてしまつた光景だ。力を使えばそうなる。

すると、後ろのほうから足音が聞こえた、おそれりへ回り込んで確實に仕留めるつもりだったのだろう。

俺はすぐさま向き直り、炎でまとめて飲み込もうとする。

あたり一面を覆い尽くす火柱は何人も月人を巻き込んで天へと昇る、しかしそれで全員しとめられるほど甘いわけがない、きつちり何人か避け切っている。

そいつらはレーザーを撃つてくるので右へ左へ飛びながらそれを回避していく。

そして紫黒を飛ばしていくが一向にあたらない、どうやらなかなか戦闘能力の高い連中が集まっているようだ。

けれどもそれもここまで、さすがに避けようのない攻撃まで避けるほどの連中ではあるまい。

俺は霧を全力で周りにまき散らした。その怒涛の津波に全てが巻き込まれていく。まわり一面が同じ色に染まる光景はなかなかに幻想的だ。

そしてもう一回炎を周りにまき散らす。あらゆる所に侵食しているそれは、すべてを飲み込んで大きくなつていった。

そして、残つたのは誰もいなかつた。こんなに簡単に終わつてしまつるのは拍子抜けしたが、所詮月の民なんて科学力が優れているだけ

だと認識せてもいい。

それと、あとせこいつら適当に埋めとへか。

それから、穴を掘つて埋めるだけの単純な作業に終わった。証拠隠滅はよし、あとは俺が何も知らないふりをすればいいんだ。

この返り血は適当にでっちあげるか、一人くらい倒したっていいともそれが本当かは誰にもわからない。

周りの損害を確認してみる。屋敷は半壊、周りの自然もめちゃくちゃだ。

さてと、まあこいつまでやったんだからつまづいて行ってくれてるといな。

まあ永琳もいるんだし、輝夜もつまづいて逃げられたとは思ひ難い。

「なあ霧よ、お主なら本当のこと知つていろのではないか？」

あの後は、特に何も起ること無かった。  
俺は何も知らないで何とかまかし、かぐや姫は月に帰ってしまった  
たで結論づいた。

あのあと帝のところに届けられていたらしい蓬萊の薬は、処分されたと見せかけて妹紅が飲んだのだろう。多分。

あのあとから、都は少し活氣がなくなったものの、いつも通りの生活が戻っていた。

俺も帝も、今ではただの友人通し。まあ一応俺は帝の所で陰陽師をさせてもらってる。評判はなかなか良くて、仕事には困っていない。帝は、かぐや姫がいなくなつたときはかなり落胆して、仕事もろくに手を付けられなかつたが最近はまともに戻ってきてる。それに蓬萊の薬を処分したことを後悔はしていないらしい。さすがだ、潔いところは潔い。そこは尊敬させてもらひます。

「なんの」ことだ？」

突然帝がこんなことを言い出した。

「なに、かぐや姫は本当に月に帰っているのかと思ってな

「俺は知らないよ」

「そうか、突然済まないな」

今頃どうしてるんだろうか、輝夜は。永遠亭にたどり着いたのかな?  
? 次に会う時はいつになるかわからないけど、まあ元気でやって  
いるんだろう。

そしてそれからば、大きな事件が起こることもなく

## 騎士は姫君を守る盾であり剣でもある（後書き）

えーと、とりあえず次回は時間を何十年か飛ばしたいと思います。そろそろ次のキャラとか出したいのできつかけまでという感じで。というかもこたん出します。

もこたんの口調は原作口調で行きたいと思います。女の子っぽい感じ。

まあとにかく竹取物語編、終了です。

けど後でもちりん再会させますよ、いつ原作に入れるかは未定ですけど。

まあ多分その前に迷いの竹林に行かせると思つので。

というか本当に原作入らずに突っ走るつかとか考えてますから。だって原作入っちゃつたらストーリーが決まっちゃつてそれはそれで寂しい気がしませんか？ あくまで僕個人の意見なんですけどね。まあいつかは本当に入るんですけども。

## 建前の裏切りは出会いを引き起した

「本当にいいのかい？」

「うん、だつて本人がそれでいいっていってるんだからさ。それでいいに決まってるじゃないか」

神奈子は、起き上がる力も残っていない友神に声をかける。その選択で、本当にいいのかといつよいに。

彼女は考えた。これからまた、三人で馬鹿騒ぎしていく方法を。一人欠けた状態ではなく、三人、もしかするとあの馬鹿のことだからもう一人や二人増えているかもしぬないがとにかくだ。

けれども、彼女の意志を尊敬しようと思つ。

それを実行するのはまだ早い。あくまで、機会を待たなければならないのだから。

さてと、そのためには準備をしなくてはならない。

いつになつたら根付いてくれるのだろうか？ 見えざる人には証拠もないようなこの話が。

どうもつい先日、かぐや姫が月に帰つたという話だ。どういうことかはわからぬけどもこれで彼がいつここに戻つてくるかわからなくなってしまった。

ことが早めに進むといいんだけど……



妖怪にとつてはあつといつ間の年月も、人間にとつては悠久に近いものである。

妖怪と人間の一番の違い、それは寿命である。

そして、俺は今それを改めて知る羽目になる。大切な人の死というものによつて。

「帝……」

俺が都に来てからもう何十年という月日が過ぎた、そしてついに彼には寿命というものが来てしまつたのだ。

人間という者の前に立ちはだかる絶対的な壁、人間である限り決して覆ることのないそれは、確実に彼の命を奪おうとしていた。

彼は最後まで人間でいることを選んだ、その気になればいつだって悠久の仲間となることができたというのに。そう、友人に一言頼めば、躊躇いはするものの受け入れてくれたであらう。けれども彼は人間であることを望んだ。

「本当に、短くて長かつたよな……」

寝台に横たわり、寝息を立てる帝を見守る。おそらく誰も来ないのは気を使ってくれているからであるうか。最後は俺たち一人だけにしてくれるということなのだろうか？ わからない。

彼はもう既に長くない。おそらく今夜を越えることはできない。話ができるのも、これが最後であろう。

そこで帝が目を覚ましたらしく、ゆっくりと窓を見ていた。やの焦点はどこか虚ろだつたが。

すると、帝が口を開いた。

「なあ霧よ、この老いぼれの最後の頼みを聞いてくれはしないか？」

「……なんだ、いってみろ」

最後の頼み、それくらい聞いてやらいで何になる？

「儂はな、みなにもお前にも帝と呼ばせていた。それはなぜだか知つてゐるか？ それはな、名前がないからなのだよ」

そつと息を継ぐと、また続け始めた。

「帝という役職でいままで呼ばれておった。けども最後は名前で呼ばれて逝きたいものだ。そこで、主の名前を儂にくれぬか？ 紅羽の姓を儂にくれぬか？」

俺は、たつた今知つた事実に驚きはしなかつた。だつて薄々感づいてはいたからだ。

彼が名前で呼ばれない理由、それは何か。そう考へれば自然と思いつく答えた。

「ああ、わかつたよ。あなたは今日から紅羽で、俺は今日から霧で  
名字なんかない」

これでいいんだ、これでいいんだ。

「うれしこのひ……うれしこのひ」

そして、紅羽は一通の手紙を俺に手渡した。

「おそれぐ、これから都に一つの大きな変化が起る。それが一段落ついたらこれを読んでほしい。そして同志たちに伝えてほしい……」

それっきり、彼は動かなくなつた。俺はそつとその場を後にした。  
彼の最後の言葉の意味を考えながら。

…

広間でそつと息をついている、外が何やら騒がしいが知ったことではない。

ただし、今は考え方をしてみたい。もう少しだけ彼……紅羽のことを考えていきたい。

たつた一つの偽名で満足していった彼のことを。

けれども、その望みは長くは続かなかつた。

「何のつもりだ？」

「気がつけば、広間は既に多くの陰陽師たちによって囲まれていた。そしてとつたに気がついて払った、あきらかに俺を狙っていた矢が落ちている。

「もう一度言ひ、何のつもりなんだ？……答へるー」

「新しい帝の」命令だ。今都に住む妖怪全てを殺せ、そして妖怪たちが一度どこの町に足を踏み入れることのないよう」と

……なるほど、新しい帝は妖怪がお嫌いなようで。おそらく紅羽の影響力がなくなつたことで大きく出てきたのだ。「そして妖怪全てを殺すように命令した。

「我々としても従いたくないんだが……そうしなければ我々の首が飛ぶ、どうか許してほしい！」

……要するに全員斬されてるわけだ。

「あと、ここから先は私の独り言だ。決して霧殿に言つたわけではないからな」

そして言葉をつづけた。

「我々は、あなただけでも逃がしたい。さすがに圧倒的な強さの前に殺すことなど出来なかつたと言えば帝も納得してくれるだろう。そこでだ、どうかその力の片鱗をわれわれに見せつけて逃げてはく

れないだろ？」「

……ああ、よくよく見てみたらこいつら全員俺と一緒に仕事したことがある連中じゃないか。たしか今しゃべってんのは杉村伊助とかいう俺が鍛えてやった奴だ。

なるほど、俺を殺したくはないわけか。まあ俺だってこいつら殺すのは気が引けるし、その条件を飲んでやるうじやないか。

「わかった、ただし覚悟は決めろよ」

「わかつておる、霧殿を裏切るような行為をするわけだからそれなりの代価は払うつもりだ」

……いい心がけじゃねえか。

俺は霧をそこいらじゅうにまき散らし、広間をめひめひめひしてついでに何人かふつ飛ばしてやった。

そして、俺は崩れゆく建物の中から脱出すると都の外に向かって翼を広げて飛び立った。

そして空を飛んでいると、何やら人だかりと微妙ながりもさまでそんな力が発せられている場所を見つけた。  
なにやら力の弱い妖怪のようなので、このまま見て見ぬふりをするのも気分が悪くなる。そこで助けることにした。

俺はその場所に向けて急降下する。俺にだつて一人くらいは運ぶ余裕があるだろう。

降りて行くうちに全体像が見えてきた。白髪の妖怪が十何人の陰陽師連中に囲まれている。

俺は炎で隔離してその間に搔つ攫おうという作戦で行くことにした。そして、炎を体にまとい地面に着地する。するとあたりには火柱が立ち、中には簡単に入つてこれなくなつた。そして改めて助ける対象を見直すと、そこで驚愕する羽田になる。

「（）いつ妹紅じやん、なんでこんなところにいるのー。」

そう、俺が助けようとしている奴は、妹紅だったのだ。

「えつとあなたは……」

妹紅が驚愕した目つきで俺に話しかけてくる。そうか、まだこのときは妹紅は何にも力なんてないんだ。だからこんな状況になつてゐわけだ。

「話は後だ、とりあえず助けに来たから逃げるぞ！」

「えつ、ちょっとまつ！」

俺は言い終わる前に妹紅を抱えて空に飛び出した。

それから少し飛び、林の中の目立たないところに着地する。妹紅も

最初は暴れたがもつおとなしくなった。

「あの……」

すると突然妹紅が声をかけてきた。

「助けてくれてありがとう……」

「ああなんだ、そんなことなら別にいいよ。なんか見捨てるに田覚  
め悪いしさ」

俺は「んな」としか言えないんだけどさ。

「やついえば……」の後はどつか行くあてとかあるの?」

妹紅はおそらく藤原家ともつながりがもうないだろ?からどじにも  
安心して身を預けられる場所なんてないはずだ。

「一つもないわよ」

やつぱりか。

「俺は一応守矢神社に戻るつもりだけど……どうするつもりだ?」

「……つこでいい?」

妹紅は微妙に恥ずかしそうにやつぱり言った。

「別にいいけど、まあ結構近くにあるし。神奈子たちも文句は言わ  
なことは思つけど……まあ大丈夫」

やつこえば一言言わせてほしい。

「それと、俺には霧つて名前があるから霧でここよ。そっちの名前は？」

「藤原妹紅」

「やつか、じゃあ出発するか……とその前にうつと待つてくれ」

俺は、帝の最後の言葉を思い出しながら手紙を見てみる」と云った。  
そこには短く、一言でこいつ書いてあつた。

『『どうか、人間を嫌いにならないでくれ。』』

と。

馬鹿野郎、あなたの頼みを俺が聞かないはずがないだろ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5449z/>

---

東方吸血鬼

2012年1月10日16時56分発行